

ニュルンベルク旅行記

ヘルマン・ヘッセ 作
石橋 邦俊 訳

我が友なるロイトホルト夫妻、

フリッツとアリーセへ捧げる

不幸にして、この旅の思い出の記の筆者は、己れ
の行為の明確な理由を自覚している人間の一人ではない。
また、彼は、不幸にして、自分にも、あるいは他の人
たちにも、そのような理由があるなどと信じている人
間でもない。理由はいつても不明確である、私はそう思
う。因果のつながりは実生活のどこにも生じはしない、
頭の中にあるだけだ。発達の究極に達し完璧に自然を
脱した、完全に精神になり切った人間であれば、その
生活に水ももらさぬ因果の網を認めることが確かにで
きるにちがいないだろうし、考えを巡らさずとも自覚
できる原因や動機を唯一のものとして信じて疑わぬ資
格を与えられてもいよう。彼は徹頭徹尾、完全に自覚
のみで構成されているのだから。だが、私はそのよう

な人間、と言つか、そのような神様に、これまで一度
も出会ったことがない。それに私は、私たち別種の人
間の場合、ある行いや出来事に対する理由づけすべて
を疑ってかかっても構わないと思っているのだ。何ら
かの「理由」をもとに行動する人間などいはいはしない。
勝手に思いこんでいるだけである。それにそうした人
間は、虚栄心のため、自分の美質をひけらかすために、
他人にもそう信じこませようとするのである。ともか
く、自分自身のことであれば私は、私の行動を惹き起
こす動因が己れの悟性も意志も届かない領域にあると、
いつも、どんな時にも確かめることができた。である
から今日、テッシーンからニュルンベルクへの私の秋
の旅、二ヶ月ものこの旅の理由がそもそも何であった
かと自分に問いかけるとなると、ひどく困惑してしま
う。考えれば考えるほどに、いくつもの理由や動機は
分裂し、枝分かれし、さらに分かれて行って、遂に遥

かに遠い昔にまで遡り、それも原因と結果を連ねた直線ではなく、因果の糸の織り成すいくつもの網目の集まりのようなもので、最後には、それ自体は此事である偶然のこの旅行が、私のそれまでの人生の無数の点によって規定されていたかのように思われてくるのである。私が把握できるのは、この織物のわずかな、もつとも大きな結び目だけだ。一年前、シユヴァーベンに一度、短期間滞在した時、彼の地に生まれブラウボイルンに住むひとりの友人から、私が彼を訪ねてくれぬと不平を聞かされた。そこで私は、次にシユヴァーベンを訪なう折りにこの怠慢を償おうと彼に約束したのである。これが、外面的には、私の旅行の第一の契機だった。しかし、後になつてはつきりと気づいたのだが、この約束自体にも背景や付随する理由があつたのだ。喜んで迎えてくれる旧友に再会するのは確かにとても嬉しいが、しかし私は、旅行も人に会うのも苦手な不精者である。辺鄙な土地の小さなローカル線を幾駅分か走ると思つだけでも、およそ有難くない。いやいや、私にあの約束をさせたのは単に友情でもなければ、ましてや御愛想などではない。まだ別のものがうしろにあった。「ブラウボイルン」という名前の背後に、魅惑でもあり神秘でもあるものが隠れていた。いくつもの面影、いくつもの思い出、そしていくつもの

誘^{いざ}ないがあふれるほどに。ブラウボイルン、第一にそれは好ましく、古い、シユヴァーベンの小さな地方都市であり、少年の頃、私自身が学んだよつな、シユヴァーベンの修道院学校の所在地である。更にブラウボイルンには、まさしくその修道院には、見ておく価値のある有名な、貴重な品々がある。特にゴシック期の祭壇である。もつとも、こうした美術史上貴重な品々を挙げて、私を動かすのは難しかっただろう。だが、なお別のあるものが、「ブラウボイルン」という言葉をめぐる様々な連想の中に響き合い、まじり合つていたのだ。シユヴァーベンの詩的であり、そして同時に、私にとつて並外れて魅力あるものが、ブラウボイルンには、あの有名な断崖、クレツツレ・ブライがある。そしてブラウボイルンの湧水、ブラウトゥップには、かつて麗しのラウが住んでいた。そしてこの麗しのラウはブラウトゥップから地下の水脈を伝つて尼僧院の地下室まで泳いで行つた。その地下室の泉の水場に、彼女の話を伝える人の筆によれば、「胸もとまで水に浮かび漂いながら」姿を現した。ブラウとラウという魔法の名前が漂わせる、この陶然たる幻想の中で、何としてもブラウボイルンへ行きたいという私の欲求が徐々に育ってきたのである。こうした事情を頭で理解し、ブラウトゥップの、麗しのラウの、彼女が水に漂

う尼僧院の地下室の眺めこそが私の心に抱く望みの的なのだと、そして、ブラウボイレンへの旅行を受入れる自分の心構えはこの泉から流れ出しているのだと確信するには、まだまだ時間がかかった。いつも私は発見してきた。私だけではない、自分の行動の理由を提示できると思っている、かの羨むべき人々も実は決してそんな「理由」によって動かされたり導かれたりしているのではない。原因は常に恋情である。そして私は、この恋情を自分に認めるに毫も吝かではない。それは私の青少年期のもっとも美しく、もっとも強力なものの一つなのだから。文学作品の中の二つの女性像が、青春時代、私の文学的な、そして感覚的なさまざまな空想を優美な理想像となつて導いてくれた。ともに美しく、ともに神秘に満ち、ともに水に浸されていた。『しわくちやこびと』の麗しのラウト、緑のハイソリヒ』の水浴する美しいユーディットである。二人の女性のことを私は長い間、ずいぶん長い間、もう一度も考えはしなかった。二人の名前を一度も口にしはしなかった。二人の物語を一度も読みはしなかった。そしてこの時、ブラウボイレンという言葉に思いをめぐらしていると、突然、麗しのラウトに再会したのだ、胸もとまで水に浮かび、地下室の水場を囲む石の手すりに白い腕をもたせかけているラウトに。ラウトは私の旅

行の動機のすべてをこころえ、微笑していた。そして、彼女のかつての住みかだめぐりあおうと望むなど確かにほとんど許されようのない麗しのラウトのほかにも、これらの言葉の響きと空想の圏内には、私の幼少年時代とその濃密な夢の世界や、詩人メリーケや、測り知れぬほど古いシユヴァーベン of の言い回し、遊戯やメルヒエン、子供のころ耳にした言葉や風景の様々な思い出が織り込まれていた。父の家や子供時代を過ごした町に、私は同じような魔法を感じられない。余りに頻繁に再訪し、余りにも徹底的に失われてしまっていた。しかしここ、「ブラウボイレン」という響きをめぐる数々の心象の周囲には、幼少年期と故郷と土地の人たちへの心からのつながりのうちで、なお私の中に息づいているすべてが集約されていた。そして、このすべてのつながりと思ひ出と感情は、かのヴィーナス、麗しのラウトの徴のもとにあつた。これ以上強力な魔力は、無論、考えられない。

ただし、こうしたすべては、まだ私のうちにまどろんでいた、そしてそのどれひとつとして私の意識に上つて来ようとはしなかった。そして旅行は全体として、さしあたり、ほんの約束に過ぎなかった——それを果たすのは二年後でも、十年後でも良いのだ。春のある日、そこへウルムでの自作朗読会の招待がやって来た。

他の時に届いたのなら、いつものやり方で片づけていただろう、丁重な断りの葉書一枚でことは終っていただろう。しかしさて、ウルムの招待状が着いたのは、どうでもよい時ではなかった、特別な時だったのだ。生きることが並外れて辛い時、憂慮と重荷と不快ばかりに取り巻かれ、晴れやかな見通しひとつ見えぬ時、そして、変化、転換、逃亡という考えなら何でも願わしく思えてしまう時、そんな時に招待が届いたのだ。それ故私は、例の丁重な葉書を書かなかった。招待状にもう一度、目を通した。すると早くも、ウルムはブラウボイレンのすぐそばだなという考えが浮かびはじめていた。そして招待を一日、二日、机に寝かせておいた。それから私は、ひとつだけ条件を付けて承諾した、朗読会は寒い冬のさ中ではなく、秋か春とすること。ウルムの関係者は十一月の初めと日を定め、そこで私は諒承した。もっとも、かなり先の約束をする度にいつも自分で付している例の小さな「シンリリ・ウホ」がなかったわけではない。頭の片隅でこっそり呟くのだ、「いざとなれば、いつだって取り消しの電報を打てばいいのさ」

さて、時は春であって、十一月まではずいぶん間があった。ウルムの約束について私は大して思いをめぐらさなかった。他の考え事やら心配事やらがあったの

だ、もつと身近な、もつと差し迫ったものが。そこで何かの折りにウルムの一件が思い出されると、その度に私は一種不機嫌な気持ちで考えた。価値があるなどと信じていない、そして結局は厄介な義務になりかねない催しに自分はまたもおびき出されてしまったと。

ともかく人前に立つのが職業である歌手や楽器の演奏家、あるいは俳優たちは、いつも半年後、一年後を目処に、あらかじめ定められた日時を自らに課し、いかにそれが彼らの仕事とは言え、その時の気分、気ままは放棄して自分の技を披瀝せねばならぬという、この厄介な仕組みに甘んじざるを得ない。しかし文筆を業とする者には、ほとんど遠出をせず、静かに村に暮らす書齋の人間には、再来月の十二日、某市にて否が応でも人前で朗読せねばならぬなど、事情次第では考えるだけで総毛立つものなのだ。その頃ちょうど病気になるっているなど、いかにもありそうではないか！ ちょうどその時が恵まれた仕事の時だったり、幾度もいくら長く待ちわびていても訪れなかった絶好の時が到来していることだって、案外にあるかも知れないのだ！

——となれば、最良の仕事の最中に、数日、すべてをわきに置くよりない。トランクを詰め、時刻表を念入りに調べ、旅行をし、見知らぬ都会の宿のベッドに眠り、見知らぬ人たちを前に自作の詩を読みあげるより

ない、おそらく、その時には自分と一向、何の關係もなくなっている詩、用済みで愚かしいと思われる詩を、である。かくして詩人は、自惚れや成功欲、あるいは旅行欲から朗読会というエサにつられると、しばしば手ひどいシツペ返しをうける羽目になる。

規則正しい、組織だった仕事をこなしている人たちが、毎日八時と二時に仕事を始め、電報ひとつで切りつめるだけ切りつめた日程の遠路の旅行へ発ち、用事のない午後ならば、それはもう小さな樂園を意味し、娯楽にも時計片手で専念する人たち——このような人々には、日々、怪しげな生活を送っている詩人の怠惰、無軌道、気まぐれ、時間の浪費など、まったく想像がつかないのだ！ 確かに、義務を守り、一種の規律と持続力を以って仕事に精励する詩人たちは、毎朝、決まった時間に始め、粘り強く幾時間も机から離れない作家、詩人たちがいる。天候や周囲の雑音にも、自分の気分や怠け心にも煩わされぬよう己れをしつけた人々、高貴な雄々しい男たちだ。この人たちの靴の紐を解くことも厭わないが、このお手本どおりにしようとは、私にとつて望みなき所業だろつ。自分について言えば、きちんとした勤勉な人が、私にとつて「時」がいかに無価値であり、数日、数週どころか、数ヶ月すら私がいかに浪費し、いかなる兎戯の数々を以って人生を空

費しているかを知ったならば、金輪際、握手してくれまいと思っている。朝、何時に起き、夜、何時に就寝し、いつ働き、いつ休むか、私にそれを命ずる上司も官庁も規則もない。私の仕事に納期はない。それ故、三連の詩が午後いっぱいできようが、三月かかろうが、けつこう成り行き次第である。仕事に費やすには余りに素敵な日なら、散歩したり、水彩画を描いたり、また、無為を決めこんでその一日に敬意を表する。曇りすぎたり蒸し暑すぎたり、あるいは寒すぎたり暑すぎたりして仕事はやれないような日は、ソファに横になつて本を読んだり、とりとめのない空想を色鉛筆で紙いっばいに何枚も描いてみたり、あるいは、一切、ベッドから出ないでやり過ごす。冬場や、体調が良くない時は特にそうだ。愛用の万年筆が見つからなかったり、インドと中国の神話の関連について思い巡らす必要を感じたり、あるいは、朝の散策で美しい女性に出逢つたりした時は、無論、仕事など論外である。ただし、仕事は私の長所ではなく、根本において厭わしいと言つても、仕事ができる状態を常に保持しようとする努力は、私にとつて高次の義務であると断つておきたい。無為のための時間はあるが、旅行や人づき合いや釣りや他のしゃれたことのための時間は、私にはない。あろうはずがないのだ、私は常時、仕事場の近

くで、ひとり、邪魔されず、いつ訪れるとも知れない仕事に行住坐臥、備えていなくてはならない。明日の夕食にルガーノへ招待されるとすれば、それがもう煩わしい。稀な美しい瞬間が、魔法の鳥が私に唄い、仕事への欲望が呼びかける瞬間が、明日の夕方飛んで来ないとも限るまい。閑人ではあっても、仕事をする準備態勢をひそかに、常に、毎日、確認しておきたいこの種の人間にとつて、これこれの定められた日時にどこそこに出現し、何らかの仕事をしなくてはならないと数ヶ月間、前以つて頭に入れておかねばならないということ以上に厭わしいものは全くないと言つてもよい。

仮に私の無軌道な、無駄だらけの生活を弁護する必要が生じた場合、私だつて自分の気を軽くするために少々申し開きをしてもよいだろう。たしかに年に幾度かあるかないかだが、本当に仕事をその時には、天候も体調も、障害も昼も夜ももうなくなつてしまふのだし、その時は、世界も自分自身も忘れて、ヒンズーの苦行者のように狂熱的に仕事の渦に身を投じ、その後、戻ってくる時には、疲れ果て、力を失い、くたくたになつてゐるのだと、これくらいは言つても良いだろう。更にこれも付言して良いと思うが、私の時間の浪費は、単に怠惰や無規律のではなく、現代世界の

もつとも神聖な、そしてもつとも狂気じみた命題「時は金なり」に對する意識的な抵抗でもあるのである。この命題自体は、間違ひなく百パーセント、正しい。時間は簡単に金へ変えることができる、それは電流を容易に光や熱に変えられるのと同様だ。人類のあらゆる命題でもつとも愚かしい、この命題の狂気じみた卑しい点は、「金」が無条件に最高の価値の代名詞とされてゐる、ここに尽きる。しかし、証明は求めないで欲しい。それらしい反証をいくら挙げてみても、私は實際、閑人である、時間の浪費者である、不精で仕事嫌いの人間である（その余の悪徳については口をつくむにしても）。こんな私を軽蔑するも羨むも人の勝手だ——自分の悪徳の代償をいかに高く支払つてゐるか、私以外の誰にもわからないのもだ。だから、それはそれで良しとしよう。それはともかく、「時は金なり」についてはもう一言しないわけにはいかない、これは私の旅の次第ときわめて密接なつながりがあるのだから。くだんの現代世界の信仰箇条と、この現代世界自体（私はそれを機械文明全般と解している）への私の反感は大きく、この世界の様々な掟への随順を私は、ともかくも可能な限り拒絶してゐる。例えば今日、鉄道を使えば一日に千キロ以上も移動できることが一種、文明の成果とされてゐるが、走る列車に四、五時間以

上も我慢しいしい腰をおろしておくなど人間にふさわしくないと私は思う。私の場合、人が一昼夜で終える旅行に一週間が必要なのだ。旅の行く先々で迎え入れてくれる友人たちにとつて、このやり方は時に多少、御荷物になる。ある場所が少々居心地良くなると、先の旅程やら荷作りやら、駅や車中での見苦しく、げっそりするような騒動全般やらを嫌がって、よく何日も駄々をこねる癖が私にはあるのだ。多くの賢者が示し給つた処世訓には次の格言が含まれている、「汝の最後の一日である如く、日々を生きよ!」とすると、さて、自分の生涯の最後の日に、煤を吸つたり、トランクを引きずつたり、狭い改札口に身体をねじ込んだり、鉄道旅行について回る、ありとあらゆる馬鹿げた作業をこなしたりしたいなどと思う者がいるだろうか?そこで幾らかしゃれているのは、唯一、無選択に他人と一緒に閉じ込められることだけが、いくらしゃれていたつて、数時間もすれば、たいてい、その魔法は失われてしまう。だから、読者諸兄が幸運に恵まれたとして、ある列車の車中で、諸兄の心の友と定められ、その人がいないのなら生きていたいなどもう望まない人物と同席するようになったとしたら、そんな時、暫しの後に、ともに列車を下り、どこかの素敵な道草の地で、草や花や、青空や雲がまだあるだろうかと一緒に

に確かめてくれるようその人を説得できぬとしたならば、諸兄はまことに能なしであると言わねばなるまい。私流の旅行が旅行者をきわめて早く先へ運ぶものではないこと、いわば中世のレベルに止まっていること、それは否定できない。いつか意を決してベルリンへ行こうとするならば(今日までは、どうにかこいつを免れてきたが)、この旅行には最低でも十二日が必要だろう。私の旅行法を是とし、その多大な利点を認め得るには、まず、完全に非現代的な視点に立っていないければならぬ。たしかに欠点もある。私流の旅行は、例えば、かなり費用がかさむ。その代わり、私の旅はこれまで、現代的な手段を以つてしては到底、手にし得ぬだろう多くの楽しみをもたらしてくれた。そうした楽しみを私は自分に少々味わわせてやりたいのだ。そんな楽しみを私は異常に高く評価している、もとより、もう考えられぬほどに楽しみに飢えた私なのだから。生というものを全体として、痛みとして、苦しみとして感ずる、単に観念において、何がしかの文学的美学的なベシミズムにおいてのみではなく、現実的に、肉体的にそう感ずる、これは少なからぬ人間の運命である。このような人間は(残念ながら私もそのひとりだが)、快樂を感ずるより種々の苦しみを感ずる方により多くの天分を有している。呼吸や睡眠、食物の摂取

や消化など単純極まりない動物的な活動すべてが、この手合いにはむしろ、楽しみよりは苦痛であり、労苦なのだ。にもかかわらず、しかしここで、自然の意志に促されて、生を肯定しようという、苦しみをよしとしようという、何とか踏みとどまろうという衝動を身中に覚えるものだから、この連中は、ほんの少しでも喜びとなり、ほんの少しでも気を軽くしてくれ、ほんの少しでも幸せを感じさせ暖めてくれそんなものすべてに、異常なまでに執心する。そのため彼らは、こうした素敵なものすべてに、普通の、健やかな、ノーマルな、そして仕事好きな人たちにはあり得ないくらいの価値を付与するのだ。このようにして自然は、ほほ万人がある種の敬意を捧げる、最高度に美しく、かつ、複雑なものすら生ぜしめる。フモールである。つまり、かの苦しめる人間たちの内部に、かあまりに柔弱な、あまりに不器用な、愉樂をもとめることあまりに強く、慰めに恋々とした人間たちのうちに時として、人がフモールと呼ぶものが生まれ出る。持続性の深い苦しみの中だけに生い育ち、人類の創り出すものとしてはともかくも比較的マシな部類に属す一種の結晶である。苦悩する者たちが労多き生をそれでも忍び、また、むしろ讚美せんがために創出したこのフモールは、ところが例の別種の人たち、健やかな、苦しみのない人た

ちには滑稽なことに常に反対のもののように受けとめられてしまう。全く制御し難い生の喜びであり快活さである何かがそこで爆発しているかのように映するのだ。健やかな人々はその時、我が意を得たりとばかりに膝を打ち、いななくごとく哄笑する、そして、時々、大人気、大成功のお笑い芸人、何某が原因不明の気鬱症の発作に襲われ身投げしたなどというニュースを読むと、いつもぼかんとなって、少々侮辱されたような腹立たしさを覚えるのである。

有り余るほどに時間がある私が、あれこれと話を脱線させるのを大目に見て頂きたい。速やかに本来のテーマへ戻るつもりである。あるいは、それがうまく行かなければ、ご自分に問うてみて欲しい、私のような人間が、鉄道を拒否しながらもやはり利用し、気散じや慰みことはないかと常にひそかに窺いつつ、のうのと日々をやり過ごし、自作朗読会への招待は受けるくせにそんな活動には懐疑的な考えを持ち、真面目で、現実的で、現代的で、有能で、仕事を厭わぬ生き方を否定し小馬鹿にしてみせるのが一種の悪いスポーツになってしまっている人間が、旅行について述べようとしている事柄にそもそも重要さなどあるのだろうか。いや、そんな浪漫派が語る旅の話など、決して重要ではあり得ない。だから、この道化の話に耳を貸

そうというのなら、ご承知おき頂きたいが、フモリストたちの例に倣って、このたわけ者はくり返しくり返し、自分の表向きの主題を見失っては探し出すのに苦勞しなければならぬのである。あるいは、この男はある種のフモリストなのかも知れぬ。であれば、何を書こうとも、フモリストたちにとって掲げる題名やテーマは常にすべて口実に過ぎない。実のところ、彼らがテーマとするものは、いついかなる場合でも、ただひとつ、人間の生の奇妙な悲しさと（こんな表現をお赦し願いたい）くそ下らなさ、そして、このやりきれない生が、にも拘らず、かくも美しくも貴くもあり得ることへの驚き、これに尽きる。

私の旅行については、さて、以下のような具合だった。夏になっていた。その時々生のメロデーが朗らかにわたったわけではなかった。外からの憂慮に私は取り巻かれていた。それに、昔から様々に私を慰め樂ませてくれた趣味、読書と絵を描くことも、もうあまり喜びを与えてくれなくなってしまっていた。終始、眼が痛んだのである。たしかに今に始まった障害ではなかったが、この時ほど激しく痛み、かつ、長く続いたのは私にとって初めてだった。はっきりと私は感じた、望みを成し遂げて手に入れたひとつの状態が、またもや悲しい終わりを迎えているのだ、再び意味を獲

得するために私の生は、ほどなく新たな徴のもとに到らねばならないのだと。何年も費やし、いくつもの犠牲を払い、どうにかこの時私は自分の隠栖の庵を結んでいた。人目に触れず、全く孤独に、我が僧房に座し、自分の遊戯とも悪癖ともいえることどもにいそむことができた。考え、空想し、読み、描き、杯を傾け、書く…そしてこの時、この望みは満たされていた、この試みの果実は十二分に味わい尽くされていた、そして両の眼が痛み、書物も絵も仕事も、もう喜びではなくなっていた。現状がもう堪え切れぬほどになり、その炎に私が十分に焼かれてしまっただけで、今の情況から何かしら新たな状態が、新たな生の試みが、新たな受肉が生じるようになるのだろう。もう幾度となく経験したことである。今は痛みをつぶさに味わい、眼を閉ざし、みずから小さくし、運命を甘受する時である。この観点に立てば、さて、十一月初めに定められていたウルムへの旅は非常に都合良かった。何らかの変化ではないにせよ、ともかくも気分転換と新しい映像と新しい出会いをもたらしてくれる。孤独の暮しの中断であり、何かへの関り、何かへの心配りへの強制である、外部への導きである。O.K.、この旅行は有難い。さっそく、私は少々プランを練りはじめた。ブラウボイレンにはウルムの朗読会より前に行きたい、

何としても前に。そうした催しの後にしばしば陥る落胆や嘔吐感などを彼の地へ、麗しのラウと私の友人のモトへ持ち込みたくない。となれば、十月末に出生しなくてはならない。だが、ブラウボイレンはテッシーンの私の村から遠いのだ。この長い旅路を楽しみつつこなせるようにするには、快適な区間に細分せねばならない。ともかくもチューリヒで投宿することにした。友人がいるのである。ホテル住まいにつきものの煩わしさにさらされずに、そこで少々、都会の生活を楽しめる。音楽、上等のワイン、映画館、ひよっとしたら観劇も。しかしながら、試算することに旅行はずいぶん高くかかるように思われてきた。旅行中、数日の予定が、ともすれば数週間に伸びてしまつ男の都合など、ウルムの朗読会の報酬では考慮されていないのである。それ故、突然、アウクスブルクからも朗読会への招待が来た時、断る理由は何もなかった。私の知識では、ウルムからアウクスブルクまで列車でほんの二時間くらいだ。それなら途中下車の要は全くない。アウクスブルクの会を私はウルムの二日後と定め、話がついた。こうなると私の旅行は、一段と重要に、かつ、現実的になつてしまった。なぜなら、こと、ここに到れば、シュヴァーベンの古都、ウルムとアウクスブルクを見るだけでなく、私はアウクスブルクから当然、さらに

ミュンヘンへ足を伸ばすだろつから。あそこには友人も多く、以前、何年も前、戦争のずっと前に、楽しく良い日を幾日も過ごしたのだ。

とりあえず私は、チューリヒ、ウルム、そしてミュンヘンの友人に予定を知らせた。歓迎の返事と招待に私の旅行への意欲は高まつた。また、じっくり考えてみると、チューリヒ・ブラウボイレン間を一日で行くのも不可能ではなさそうだった。無論、その場合、朝七時か八時にはチューリヒを発たねばならない。となると、十月の終わりであつてみれば、私には暗澹となるほどに早い時間に思えたのだが、いざとなれば私だつて少々の犠牲は払えるのだ。微笑を浮かべながら私は列車を書き出してみた。

夏の数ヶ月、私の本業は文学ではなく、絵である。かくして私は、眼が使える限り、ずいぶん熱心に私たちの美しい森の外れの栗の木立の下に腰をおろし、あちこちの晴れやかなテッシーンの丘や村を水彩で描いた。既に十年前、この土地を私以上に親密に知っている者はこの世にないと自負していた。そしてそれから、私ははるかに詳細に知るようになっていたのである。画帳は厚くなつていった。そして例年のように、かすかに少しづつ、野原は黄色みを加え、朝は涼気を増し、夕べの山脈はすみれ色を濃くして行つた。徐々に私は

緑の絵の具に黄や赤を加えねばならなくなった。突然、
 麦畑がからになった。土の赤い色にはベンガラとアカ
 ネラツカーが必要となった。そしてとうもろこし畑は
 濃淡の金色を見せていた。九月になっていた。澄み渡つ
 た晩夏の日々が始まった。この季節ほど、無常の呼ぶ
 声を感じる時はない、一年のこの時期ほど大地の様々
 の彩りを己が身に摂りこむ時はない、高貴なヴァンテー
 ジの最後の杯を傾ける酒徒のように、貪り、かつ、味
 わい尽くしつ。また、いささか野心がないわけでは
 ない絵についても、ちよつとした成功があった。数枚
 売っていたし、ドイツのある月刊誌は、テツシーンの
 風景についてある作家が書いた文章に私の絵を添える
 ことを了承していた。もう絵の印刷見本に目を通し、
 画家としての報酬も受け取り、もしかしたら文学から
 すっかり足を洗い、一層自分の心になつた絵描きと
 いう職業で口を糊して行けるようならぬものでもなか
 るうかという考えを弄んで悦に入っていた。良い数日
 だった。だが、喜びながら眼を酷使し、もう描けなく
 なり、また、秋の兆しが様々に感じられるようになり
 出すと、不安が襲つてきた。今の私の生の状態は間違
 いなく崩壊し始めている。転換と変化と旅をわたしは
 決意したのだ、ならば、このままずっと、まだ待ち続
 けても何の意味もない。九月終りごろ、私は旅行に出

ることとした。

突然、なすべきことが多くなつた。今、旅行をする
 となれば、幾週間か分の荷を詰めねばならない。それ
 に私は、その間ずっと旅行者として過ごすつもりはな
 い。道々、あちらこちらにのんびり腰を据えようと思つ
 ている。多分、絵筆を執つたりペンを手にしたりする
 だろう。いずれにせよ、絵の道具は持つていきたいし、
 何冊か吟味して選んだ本もそうだ。服や下着を点検し、
 ボタンをつけ、ほころびを繕わなければならなかつた。
 箱も引き出しも皆、開けたままになつてしまつた。最
 後の最後に、朗読会用の黒の上下の状態が良好ではな
 いとわかつた。そうなれば、この服のために、ひと騒
 動加わらぬわけにはいかなかつた。そして、まだトラ
 ンクを閉める前に、朗読会への招待がもう一通届いた。
 ニュルンベルクからである。アウクスブルクからその
 足でやって来て欲しいと言う。これは熟慮しなくては
 ならぬ。私の旅行にニュルンベルクはすばらしく似つ
 かわしい。教養ある都市旅行者にとつて、ウルムとア
 ウクスブルクを補完する、およそ不可欠の町だ。そこ
 で私は了承した、ただし、アウクスブルクの翌日では
 なく、五日後である。アウクスブルクとニュルンベル
 クの距離を品位あるやり方で移動するに、この時間な
 らば十分だろう。

これで旅行の準備は整った。チューリヒがはじめの目的地である。そこから、効能ある硫黄泉の湧く、リマト河畔のバーデンに立ち寄り、穏やかな療養の日を過ごそうと考えた。しかし、大きなトランクを発送し、手荷物だけで出発できるようになったその時、九月の太陽がたっぷりと輝き、葡萄山には空色の熟した葡萄が満ち溢れた。冷たく灰色のチューリヒへ今、出かけるなど罪というものだろう。それに、葡萄摘みのことを忘れていたとは！ 取り逃がしてしまふところだった。また荷を開け、旅行を延期して、一旦逃れようとしていた出がらしの生活へもう一度めぐりこむなど、考えられなかった。しかし、しばらく会っていない友人たちがロカルノにいる。あそこなら太陽と葡萄に別れを告げずとも、自分の新しい生活を始められる。私はロカルノへ向かった。

ここで私を小さな町が迎えてくれた、ひとつの土地が迎えてくれた。昔、私はその小川の小さな谷のひとつひとつ、畑を区切る石壁のひとつひとつ、壁のひび割れに茂る小さな羊歯や赤いなでしこまで知りつくしていた。戦争中にも三度、しばらく滞在し、慰めを与えられ、くり返し元気づけられ、感謝の思いを抱かせてくれた土地である。ロカルノの人たちは大変な上機嫌だった。国際会議の開催地に選ばれたばかりだった

のだ。町は改装や飾りつけの最中だった。見物だった。シュトレーゼマン氏が滞在中、広場のしやれたベンチに腰をおろしたら、彼の服は台なしである。ベンチはすべてペンキ塗らたてなのだから。

愉快だった。ロカルノは私の旅の上々の滑り出しだ。大臣方に先んじて甘い葡萄を数ポンド、それもブリオーネとゴルドラの一番陽当たりの良い最良の畑で失敬した。そして長いひとり暮らしの後、友人たちと座し、おしゃべりをし、ペンという遠い回り道ではその最良の、最も独自の部分を失ってしまふ、一瞬一瞬に人中に生きているものを口と目で表現する楽しみを、また味わった。社交術において私は、他のどんな「術」にも増して、ひどくディレッタントであり初心者である。だが、気の置けない人たちに囲まれてこれを使っても良いという、ごく稀な時には、これ以上に私を魅了するものはない。タマーロ山上に、毎日、輝かしい朝が訪れた。そして、リヴァピアーナの岸辺の素晴らしい小道は、二十年前、いや、十年前ですらそこで楽しめた孤独と寂寥の魔力をもはや失っていたけれど、それでもこの湖畔の一隅は今も心地よい隠れ家だった。それに、ホテル近辺や人気のいくつかのハイキング道路を逸れ、坂の多い自然のままの山手に入り込めば、もうそこはヨーロッパの外、時間の外、石と灌木と、

トカゲと蛇の領する土地、色にあふれ、小さく繊細な数々の魅力と愛すべきものに満ちた、豊かではなくとも温もりのある、親しみのある土地なのだ。かつてここでトカゲや蝶やバツタを観察し、サソリやカマキリを捕まえ、初めての絵を描いてみた。それに、どこかからやって来たりオという犬と一緒に、暑い、気持ちの良い幾日、道のない漂泊に過ごしたっけ。どこにでも、まだあの頃の香が残っている。到るところ、様々な小さな思い出のしるしが、ある家の一角、ある庭の垣根が、不意に、私の過去の最も苦しかった時期、そこで見出した、あの自省と回復の時を思い出させる。生家のあるシュヴァルトの町を除けば、本当の「故郷」という感情を私が抱いたのは、生涯およそ、ロカルノ近郊のこのあたりだけだった。そして、あの頃の感情が幾らか私の中に残っていたのか、私は嬉しかった。

ロカルノには四、五日、逗留した。すると三日目にはもう、あらかじめ思ってもいなかった旅の恩恵の一つを感じ始めた。郵便が来ないのだ！郵便が持ち込む心配のすべて、要求のすべて、私の眼、私の心、その時々私の気分への不当な要求すべてが突如、なくなってしまったのだ！これは猶予期間に過ぎないこと、もう少し長く滞在する次の町では、どうしてもガ

ラクタ全部を、少なくとも手紙くらいは、また転送させねばならぬことを私はたしかに知っていた。だが今日のところは、今日と明日と明後日は、とにかく郵便が来ない。私は一人の間人だ、神の子供だ。私の眼と考え、私の時間と気分は私の、私一人の、そして私の友人たちのものである。私を急かしたる編集部も、校正を求める出版社も、サイン収集家も若き詩人も、自分の作文に助言を欲しがるギムナージウムの生徒もない。どこかの古代ゲルマン戦士同友会の誓しやら侮辱やらを連ねた手紙も来ない、そんな何もかもがないのだ、静寂のみ、安らぎのみだ！何たることか。日々、生涯にわたってガラクタや消化不能の錘の塊をどれほど飲み下さねばならないか、数日、郵便が来なくなつて初めて我々は気づくのである。しばらく新聞を読まないでいる時（もう何年も私はそうしている）とそれは全く同様だ。社説から相場表に至るまで、何という瑣末事を以つて日々、自らの朝の時間を台なしにし、心と精神を腐らせているのか、我々はその時、恥じ入るように悟るのだ。それに、郵便が来ないという一事が何をすることも支えになつてくれる、これは何とも痛快だ。何を考えようと、何を忘れようと、何を妄想しようとして、まさに私の気の向くまま！分けても、文学について四六時中、思い起こさせられたりしないのが

ありがたい。つまり、自分の身分、自分の職業のことである。胡散臭い、およそまっとうとは言えぬ、従つてまた、およそ尊ばれぬ職業に就いているということこそを思い出さなくて良いのだ。才能のようなものを頼りに自分の職業を定めるといふ、なんだかわからない若気の至りでかつて犯してしまつた過ちを！ さて、この猶予期間を私は（こう言つて良いだろうが）自覚と熟慮をもつて味わつた。この状態を何とかして続けるのはできないだろうか、何らかの策をめぐらせて身をくらし宛先不明となり、天にはばたく貧しい鳥のどれもが、地中の貧しい虫けらのどれもが、靴屋の見習いの誰もが、そうと思わずに味わつているあの幸せを再び手にするのはできないだろうかという考えを、しばしば弄んだりもした。人に知られず、愚かな個人崇拜の犠牲にならず、公衆というあの嘘だらけの、汚らしい、息のつまる空気の中に暮らさずともよいというあの幸せ！ ああ、これまで幾度か、このペテンから足を洗おうと試みたのだ。そしてその度に思い知るよりのなかつた。世界は非情であると。世界が詩人に求めるのは作品や思想ではない、住所と人たる実体である。詩人を敬つては投げ棄て、飾りつけては剥ぎ取り、味わつては次に唾を吐きかける。羨の悪いチビ娘が人形を扱つのと変わりない。一度、偽名を用いて、名声

や敵視に煩わされず、貼られたレッテルに惑わされず、自分の考えと空想を他人の名前のもとに発表するのに、ほぼ一年間、成功した。——しかし、そこまでだつた。見破られてしまつた。ジャーナリストどもが嗅ぎつけたのだ。拳銃を胸につきつけられ、白状しないわけにはいかなくなつた。束の間の楽しみは終つてしまつた。爾来、私は再びおなじみの文士ヘッセである。そして、私にできる唯一の腹いせは、骨を折つても、ごくわずかな者の口にしかならない事柄ばかりを書くといふ、これだけである。ともかく、おかげであれから、幾らかは安らかな生活を送れている。

しかし、この間、文学のことを全く思い出さずに済んだのではない。知り合いになつたある読書家は、『ペーター・カーメンツィント』の作者だからと私に熱烈な讃辞を呈してくれた。身じろぎもできぬまま、私は赤面した。この人に何と言つべきだろう？ あの本はもう思い出すこともできない、十五年来、一度も読んでいない、記憶の中で、『ゼッキンゲンのラッパ手』と取り違えるのもしばしばですと言つたものだろうか？ もっとも、私が嫌いなのはあの本自体ではありません、私の人生に及ぼしたその影響だけです、つまり、まるで予想もしていなかつたあの本の成功が私を永久に文学の世界に追い込み、絶望的にあがいて、

もう二度とそこから抜け出せないのですからと？ 彼はそうしたすべてを何も理解しないだろう。彼は（若い経験から私は知っている）作家としての自分の名声に対する私の嫌悪を、お芝居とも遠慮がちなへつらいとも受け取るだろう。どうしたって私を彼は誤解するだろう。だから何も言わなかった。少し赤面し、出来るだけ早く失礼した。

今ぞ断固として夏と南国に別離を告ぐべき時、一気にチユリヒまで向かうべき時と決心し、再び旅路につくと、いまひとつ別の旅の賜を心地よく感じとれるようになった。つまり、旅行になじんで来るや否や、別れが実に容易になるのである。別の折り、家へ帰ろうとロカルノの友人たちと別れた時、いつも、次に会うのはずいぶん先だろうという感情を抱いたものだ。別れは辛く、私の心をしめつけた。私はここでも非現代的な人間である、感情や感傷を私は非難したり憎んだりしない、逆に自問する、我々は一体何をもって生きていくのか、どこで生を感じるのか、我々の感情においてでないとするは？ 何も感じず、心が揺り動かされないのなら、いったいの財布も結構な銀行口座も、粹なズボンのひだもかわいいたの女の子も何にならう？ そうだ、人の感傷ならいくらでも嫌悪できる私だが、自分自身の感傷はいとおしいし、むしろ少々甘やかし

ている。感情、つまり心の波の細やかさと繊細な感度、それは私の授かりものに他ならない。それを資として自分の生活を営まねばならない。もし私が自分の筋力に物を言わせてレスラーかボクサーになったら、君は筋力を下位のものに見なすべきだと私に求める者はないだろう。もし暗算が得意で、大きな事務所所長になつていたら、優れた暗算能力を低価値として軽蔑したまえなどと尊大な要求をする者はないだろう。しかし、ここ最近の世の中は詩人に、そして若い詩人の少なからぬ者たちが自分自身に、要求している。詩人の詩人たるゆえんの、まさにそのものを、心の繊細な感受性、愛に夢中になる能力、愛し燃え立つ能力、これを捧げ、感情の世界で未聞の並み外れたものを体験する能力、まさしくこのような自分の強みを憎めと、それを恥じよと、そして「感傷的」と呼ばれ得るようなすべてに対し抵抗せよと。まあ良い、好きになさるが良からう。私は御免だ、私には世のあらゆる伶俐さより自分の感情の方が千倍もいとおしい。それに、戦時下で犀利果敢な人々と感傷を共にし撃ち合いに執狂する愚から私を護ってくれたのは、ひとえに私の感情だったのだ。

さて、私は心も軽く出発した。自分の住居の小部屋へではなく、世界へ向かう時の、こうした別離には何

一つ重苦しさがない。むしろ、後に残る人より優越した気分である。何のひつかかりも無く、すぐに再訪すると約束し、また、そう思いこむ。何しろ途上にあるのだもの、遊泳状態なのだもの。ゴットハルト峠の車中、最後まで私に残っていた口カルノの余韻は、この別れの軽やかさだった。そして、チューリヒ滞在中も郵便の転送は止め、その後でバーデンへ送らせようと決心した。

この沿線には私の人生で意味を持った多くの駅がある。ゲシエノン、フリーエレン、ツーク……。殊にブルンネンは、この夏、オトマール・シェックがオペラ『ペンテジレーア』を完成させたところだ——その彼の小部屋のピアノのそばで過ごしたある午後は、輝かしい思い出となって私の中に残っている。そんな駅をすべて通り過ぎ、私は素直にチューリヒの市街へ飲み込まれていった。こんな言い方をするのは、チューリヒという言葉もまた、各人に各様の意味を持ち得るからである。この単語は私にとつて、ここ何年か、アジア的なものを意味している。そこには長い間、シャムに暮した友人がいる。というわけで、私はインドや大洋や遠方の何百もの思い出の品が並べられた彼らの家に降り立ったのだ、カレーライスの薫香を迎えられ、シャムの仏壇の金箔の光に照らされ、真鍮製の仏像の

静かな眼差しを受けながら。こうした異国風の洞窟を出て、折りに触れ市街地をさすらすと、近代の中へ、他愛ないものの中へ、優美なものの中へ、音楽、展覧会、劇場、また映画館へ出歩くこと、数日の間、それは私にとつて再び、一種、混じり気のない愉悦だった。

都会に対する私の関わり方は、今日でもまだ全くお上りさんめいていて他愛ない。全体を見渡すことがなかなか出来ず、到るところ、こまごました個々のものに引き込まれ、興がってしまう。市街電車ではたくさんの顔を観察し、看板に気を取られ、ポケットに両手を入れたまま自転車で人波を抜けていく仕上げ工が見習い職人らしい男に感心したり、彼の口笛の歌を思い出そうとしてみたり、ごつた返す十字路の真ん中で白手袋の大きな手を振って、頭がどうかなりそうほどの車全部をさばいている警官に見とれることもあれば、映画館の広告に目を奪われたり、次々にショーウィンドーを見て回りながら大量の本やおもちゃや毛皮製品や葉巻やあれこれのシャレたものに感心し、次に果物屋、青物屋、ガラクタ屋、昔の切手で一杯の台紙にほこりを積もらせた暗く小さな陳列箱の並ぶ横丁に入り込み、そしてまた交通の大動脈に戻って自動車に轢かれかけ、拳句の果てはくたびれて、どこかに腰をおろせば御の字という気分になる。ただし、喫茶店や当

世風のレストランではいけない、どこか漁師街や萬屋横丁の一角の、郵便配達や荷物運びたちが仕事着のまま一合半ほどの白葡萄酒に、机ごとに皿盛りになされたブレッツェルやソーセージやゆで卵をあてている、煙くさい小さな居酒屋である。ミラノでもチューリヒでも、ミュンヒェンでもジエノヴァでも、私が漂着するのは大抵、そんな場所だ。かび臭い、幾分うらぶれた傍筋の小さな飲み屋、コップに泳ぐ二匹の金魚や造花の束程度が店の彩りで、壁にはナポレオン三世や郊外のスポーツクラブの写真が黄ばみ、禁を犯して初めて酒場を覗いてみた十代半ばのことをどこか思い出させる飲み屋である。客は足のない分厚いコップから土地の白葡萄酒を飲み（これがうまいのだ）、キャラウエーをまぶした怪しげな焼き菓子や長いピアシテングルや太く短いソーセージといった、テーブルに並んだいくつもの品をつまんでいる。こんな所では、土地の言葉、一般の人たちの言葉が力強く、混じり気なしに耳に響き、作業着や仕事着でその人間の階級がわかる。毛皮のマントを羽織った運転手が入ってくる、カウンターに立ったままシユナップスを引っかけ、主人面をしてみせ、店の親父の背をひと叩き、犬にひと蹴りくらわして、口をぬぐってボタンと出て行く。汚れた服の顔色の悪い女がやってくる、しばらくしおらしくド

アのあたり立って、用心しながらそつとおかみさんの方へ行き、エプロンに隠した空き瓶を見せ、小声で交渉を始める、そして出て行けと指さされる。若い男がドアから頭を突っ込んで大声で言う、「口ベルトはいるかい?」、親父は頭を振る、「今日、奴は五七番だよ」赤ビロード張りの椅子と小さな椰子のような植物の鉢をかかえた荷物運びが来る、椅子を壁に持たせかけ、鉢をテーブルに置き、その間に腰をおろして新酒をグラスに軽めの「ふたつ」分、傾ける。これまでその理由を考えたことはないが、こんなすべてが何故か私には面白い、見飽きるものではない、「ふたつ」分の間、もう少し多めの「みつ」分の間。

あまり高尚な趣味を持ち合わせていない私は、映画館にも出かけて行く。私は最も正統的な、そして、身勝手な思いこみを言わせてもらえば、もつとも理解ある、チャップリンのファンのひとつである。イタリヤのマチスタも好きだ。一方、歴史上の王宮の様を摸し当時の衣装をつけたスペクタクル巨編は苦手だ。お説教は御免である。

ある国際美術展覧会にも出かけ、ありとある混沌の中でひとときわ美しく力強い、カール・ホーファーの新作の数々に喜びを覚えた。その流れで、数人の画家や作家たちと喫茶店に腰をおろし、美術の世界のホット

ニユースを短い時間で聞きかじり、そんなこんなで、この分野でもしばし、最先端に立つたわけである。

こうした遠出の度に私は満足の思いを抱きつつシャムへ戻り、仏陀のまなざしの下、中国の器に囲まれて休息した。友人たちに再会し、再び客として好意と温もりに取り巻かれ、誰かとおしゃべりし、誰かと真面目に語り合い、誰かと哄笑し、誰かと乾杯のグラスをかがけること、人中へ出るのが苦手な、世間の外にいる隠者にとつて、これこそ間違いなく旅行の最大の魅力である。何らかのサークルと結びつきを持ち、どこかに所属し共に生き、他の人たちと何らかの形で恒常的な共生関係を築き上げ、それを継続することに私は一度も成功しなかったが、幸運にもいつも、孤独と孤独の合間の短い時間を共にする素敵な友人たちがいた。そしてその時には、心を開き、気おくれも駆け引きもなく語り合い、自分を預けてしまえる楽しみを味わうのだ。友人たちが、私と本当に近しく付き会い、私の愚劣さも奇妙さも隅の隅まで知りつくした友人たちまでもが、それでも私に誠意を持ち続けていることは、私が自分の少々おかしな生き方を弁護するために、あるいは提出できるかも知れない唯一確かな根拠である。

さて、このチユーリヒの幾日かを以って私の旅行は

一旦、休止した。私はバーデンのヴェレーナホーフに少し長めの予定で腰を据え、仕事用の筆記具と絵の道具を机に整え、十日間逃げ回ってきた郵便が間違いないくここにあるのを見出した。これで再び、こんな文面の葉書を何枚も書かねばならなくなった。「拝復。貴殿の御親切な寄稿のお誘いに衷心より感謝申し上げます。しかし、残念ながら……朗読や講演の要請もあつた。しかも私の気を惹くものがひとつ……。東洋、つまりインド、中国への近代ヨーロッパの傾倒に関する講演の依頼である。これなら、あれこれ話すところがあるし、それに場所が北ドイツ上部という随分遠いところであれば、更に、そもそも私に講演の才があるのならば、こうしたアジア志向の特徴のきわめて単純な構造と意味を提示するのは、私にとつて本来、楽しみですらあるかも知れない。しかし、講演は私の柄ではない。ただの一度、やってみたことがある、そしてどうにか、やりおおせた。だがあの日は、それまでの人生のいかなる莊重かつ重要な催しの時にも増して上がってしまった。やはり願ひ下げだ。「拝復。西洋と東洋に関する講演への貴殿のご依頼、大きな関心を以って拝読いたしました。しかし遺憾ながら……」

若い詩人たちの原稿もいくつか届いていた。はじめ私は、嘆息しながらだったが、神の名においてそれを

通読するつもりだった。しかし、二日かけて郵便を讀み終えると、眼もおしまいになり、猛烈な痛みに冷湿布をほどこして座っているよりなくなつた。更に、こうした詩人たちの一人が原稿に添えていた手紙がなんと不愉快だったのだ。文面に染みこんでいる媚びるような、見せかけの敬意とお追従のおかげで、決心をひるがえすのが楽だったくらいである。ともかく三人の詩人ひとりひとりに、目を痛めている上に秘書もいない私には残念ながら原稿を読むのはどうにも不可能だと、丁寧な文で数行、したためた。それから分厚い原稿に宛て名を記し、切手を貼り、十日の休息が不首尾に終つたと認めつつ、あらためて眼を細心にいたわらなければならぬ自分をよしとするよりなかつた。それだけになおさらバーデンの湯治に専念したのである。その次第は既に別のところで書いたので、くり返しは不要と思う。私は主治医と幾度も楽しい時を過ごした。自分もその友人の一人と自負して良い、宿の主人が「ヘッセさん、ポマールを一瓶、いかがですか？」と尋ねてくれた夕べも少なくなかつた。知人の訪問も稀ではなかつた。数年来、ほとんど会わなかつた我が旧友ピストリウスが出現した。この間、彼は私に劣らぬほど脱皮し、変身していた。謝意を抱きつつ、私はともに再び、暗い焔の映える、聖なるシンボルに満ちた彼

の魂の世界をめぐり、会わなかつた間に私の中から、そして以前一緒にはぐくん芽から生い出たものを彼に見せた。薄情者のルイもある日、現れた。旅行カバンを手に、数時間だけ立ち寄つて、さつさと行つてしまった。バレアレス諸島へ行き、絵を描くのだと言つた。一緒に行こうと私を随分、誘つた。その後、彼の消息はない。

バーデンの休息は、思つていたより随分早く終わった。いつもながら今度も、私は読むものや仕事の材料を余りに多く持つて来ていた。また荷作りである。すべての本と使つた下着全部をドイツへ引きずつて行く要はないと思えた。不要品すべてを呻きながら大きなトランクに詰め込み、発送した。そして最後の日の午後、持つていくものを詰めようとすると、手さげカバンには収まりきれないのである。黒の背広はボール紙の箱に押し込み、紐をかけねばならなかつた。だいたいい、ここ数日、夜、ほとんど眠れなかつたのだ。また旅行を始めねばならぬなど、まるで面白くない。明日早く、七時きつかりか八時くらいには出発し、一気にブラウボイレンまで行かねばならない、あその友人にそう伝えておいたのだ。忌々しい私の背広を手立に立ち、更に加えて、旅行を続けるのに必要なものまでいくつかが、例の大トランクに突っ込んでしまつたと気づ

いた今この時、軽率に約束を交わすということが何であるか、私はもう一度、思い知らねばならなかった。さて、私は明朝七時、チューリヒにすることにしている、だが、まだバーデンにいたのだし、荷作りについていたくらいである。それから明日、不眠の一夜の後に（というのも、鶏の声と共に起きなくてはならないという時にヴェロナールを使うなどできようか）、ブラウボイレンまでの全行程をトゥットリンゲンでの乗り換えも含めてこなし、くたびれ果て、不機嫌になってブラウボイレンに到着するというわけだ。それもこれもただ、その二日後にウルムで見知らぬ人間を前に自作の詩を歌い聞かせるため！そしてそれからアウクスブルク、もうひとつ、ニュルンベルクだ！こんな計画を立てるなんて、多分、どうかしていた！冗談じゃない、これからまずチューリヒへ向かう、そこで一泊する、そしてそこで友人とこの馬鹿げた一件を話し合い、素敵な電報を三通したため、曰く、テノール歌手氏は重い風邪のため残念ながら来演できません。やれやれ、これで救われる！

チューリヒへ向かった。友人の奥さんに駅まで迎えに来てくれるよう、頼んでおいた。そして彼女を待ちながら、ふさぎ込んでマコン「みつつ」のグラスを前

に駅の食堂に座っていた。ボール箱を背負い込み、自分の旅の気苦労を背負い込んで。薄ら寒い日だった。風邪を引き咽は潤れ、あのままバーデンに残っていればと悔やんだ、さつさとテツシーンの家へ帰っていい良かったと悔やんだ。アリーセが来た。車で家へ向かった。自分の厄介ごとやら心配ごとやらを開陳していると、大きな仏陀が「お見通し」と言わんばかりに私を見おろしていた。アリーセは、旅行を続けた方がいいという考えだ。ここで止めてしまえば、後で後悔するから、腹立ちまぎれなんかで。腹立ちまぎれで構うものか、と私は考えた、君らノーマルな連中には想像もつくまい、眠れなかったのに、その翌朝、馬鹿みたいに早く起床し、何時間も列車に座りづめになり、計画をこなし、決まったことを果たさねばならぬという時の僕たちのような人間の心の様など。私は逆らった。そして話しが激して来た時、私は決然として拒絶した、明朝早起きして旅路につくことを。私の勝ちだ、相手は折れた。明日の朝は寝ていなさいな、その後でも電報を打つ時間はあるでしょうと言つのである。

ほっと息をつくときがせいせいした。夜と朝は自分のものだ。友人が帰って来た。食事をした。少々ワインを飲んだ。安心してヴェロナールを服用し、翌朝、理性的な時間になってから、つまり、十時から十一時

の間になってから起きていった。ポール箱の代わりに私は快適な小型のトランクを借りることにした。シャムやシンガポール、ジャワのきれいなラベルが貼られている。そして食事の後、自分の運命と半ば仲直りして、私はドイツとの国境へ向かった。遅ればせながら、今になってよくわかった、ブラウボイレンまでの区間を一気に行こうと考え、早朝の列車を選ぶような愚かしい勇猛心を奮い起こしたのが初めから誤りだったのだ。今日の旅程をブラウボイレンではなく、まずトゥットリンゲンまでとし、そこで一泊して、約束より一日遅れるが、神の名において友人のもとへ、そしてクレツツレ・ブライへ到着することとした。観念して私は車室に座っていた。向かいにはひざ掛けをして、でっぴりした実業家が眠っていた。ボーデン湖畔に住んでいた時なじみになった風景が車窓をかすめて行く。ライン川とライン瀑布が現れた。税関吏と「旅券を拝見」の人がやってきた。ヘーガウの山々が浮かび上がってきた。そして、このあたりが私の故郷だった昔が次々に現れてくる。ジンゲンの駅に着いた。すると、ふと思いがたつた。古くからの友人がまだ住んでいるこの地を素通りするのは罪というものだ。しかし、旅程を組む際にジンゲンとあの友人を考慮しなかったのには確かにわけがある。ボーデン湖畔の頃をあまり考えた

くないだけの十分な理由が、私にはあるのである。思い巡らす一方、窓を開け、プラットホームを見まわしている。と、うやうやしく制服の駅員が登場し、四十分の停車を告げた。好都合である。列車を降り、町へ電話をした。私の友だちが駆けつけてくれた。旦那、奥さん、そして息子。最後に私が見た時の小さな坊やが大学生である。こうしてこの一件も落ち着いた。そして四十分が過ぎた時、やましい思いを抱かずに私は旅を続けることができた。トゥットリンゲンに近づくより早く、夜となった。灯りが点ると実業家（ザクセンの出身だった）が目覚まし、話し始めた。自分には不満がある、イタリアからの帰りである、商用だった、で、イタリアでもスイスでも文句はあれこれとある、それに大体……。彼は言った、「それでですな、あなた、私を出し抜くなんて無理ですな、お見通しなんですからな、ええ。人生なんてのはまる見えのいかさまなんですな、そうですよ、まあ、何かおっしゃりたければ、おっしゃっても結構ですがな」彼の話の中身に何ら異論はなかった。だが、口調だけは首肯しかねた。私はできるだけ口をつぐんでいることにして、トゥットリンゲンに着いた時は嬉しかった。シュヴァーベン、生まれ故郷に、私は今いるのだ。そしてこれからまた、シュヴァーベンの小さな町に一泊するわけである。宿

の迎えが待っていた。案内されて品の良い古い旅館に入った。すると、私が宿に着き、中へ入る直前、広くまつすくな町の大通りに煌々とした満月が昇った。ここで再び、私を月が迎えてくれる、これは嬉しい。がっしりした、古い、品格のある旅館であり、快適な客室だった。終始焼けるような眼を冷水に少し浸し、夕食にチキンスープを注文した。おいしいスープだった。そして、トゥットリンゲンは初めてだったので、床に就く前に町を散歩するのは妙案と思えた。コートの前を立て、葉巻に火をつけ、あてもなく歩き始めた。中央の大通りは、もう知っている。それにそれは、夕べの理想的なシュヴァーベンの小都市と言うには幾分、難があった。そこで最初の路地を逸れ、そのあたりのガラクタにいくつかつまずき、緩やかに下る草地を降りていった。すると突如、再び月が現れ、何とも美しい、静かな夜の川に影を映した。冴えた空に破風のがった軒、見渡す限り人はいない、どこかの中庭の犬の声。私は路地をゆつくり歩きまわった、橋を渡り、また戻った。水の冷気が香った。屋根の尖った破風が私の故郷の町に似ていた。生い育った町や自分の愚かな人生や一人老いて行くことなど考えていると、屋根の間から再び月が上ってきた、もう白く小さくなっていった。するとこの一瞬、子供のころのある思いが訪

れた。おそらく私を詩人たるべく定めた（その前から韻をふんだ文を作っていたが）、あの瞬間が脳裡に浮かび上がった。こういう次第である。ラテン語学校に通っていた十二才の時の教科書にはフリードリヒ大王や髭面エーバルトのエピソードや、ありきたりの詩やお話しが載っていた。どれでも私は喜んで読んだ。しかし、こうしたものの只中に別のもの、素晴らしいもの、魔法としか言いようのないもの、それまで出逢ったものの中で最美のものが置かれていた。ヘルダーリンの詩、断片「夜」である。ああ、このわずか数行、あの頃私は、何度読み返したろう！「これが詩だ！これが詩人だ！」そう感じるとかき立てられた、灼けるような、そしてまた畏怖のような思い！母と父の言葉が私の耳に初めて聞かせたその深さ、その神聖さ、その有無を言わせぬ力！子供だった私に本来の内容はわからなかったが、この信じられぬ数行から私を撃った透視者たることの魔力、詩の神秘！

——夜は来たる、
星を鑊め、そしておそらく我らを気づかふことなく、
この驚くべき女性はかしこに輝きわたる、我らのなかにありて異邦の者、

山の高みを越え悲しげに壮麗に上り来たる

青年時代にも随分多くの書物を読み、随分熱中したのだが、あの頃、この詩が幼かった私を魅了したほどに完全に詩人の言葉の魔法が私を捕らえることは、もはや二度となかった。そして後に二十歳になって、初めてツアラトウストラを読み同じように魅入られた時、読本のこのヘルダーリンの詩と、子供の私の、芸術を前にした魂の底からのあの初めての驚きが即座に思い出されたのである。

つまり、麗しのラウと詩人メーリケのおぼろげなくつもの思い出から生まれたこのシユヴァーベンの旅は、確かにこのように、私を人生の初めの頃のいくつもの響きのもとへつれ戻し、すべてが如何に深く根を張り、逃れ得ぬものであるかを告げるべく、私に定められていたのだ。ならば仮にこの旅行が他に幻滅以外の何ものももたらさずとも……ヘルダーリンの言葉を、ふと呼び起こした、トゥットリンゲンの月下のこの一瞬だけでも十分に得るべきものはあったのである。

私たちのような人間を満ち足らわせるものは、ほとんどない、しかし、言い換えれば、満足を与えてくれるのは最高のものだけだ。苦しみと絶望と喉をつまらす生への吐き気の只中であつて、これほど堪えがたいこの生の意味への問いに、くり返し、神聖な一瞬、

「然り」の一言を聞く……もう次の瞬間、その声は再び濁流に吞まれるにせよ、私たちには十分なのだ、しばらくはまた、生き長らえるのだ。そして、生きるだけではない、生を耐えるだけではない、それを愛し、讚めるのである。

ヘルダーリンの月と眠りに沈む水辺の小路から宿へ戻った。幼い日の聖なる宝のひとつとの思いがけぬ出逢いに感動し、また、慰めを与えられて。あの詩句がその夜ずっと余韻を響かせていた、泉のように深い地下から湧き出す子供のころの声がずっとと耳底に響いていた。ああ、この声に誘われ、私はどこへ到りついたらるか！ 長い月日の後に、他の人たち、印を受けぬ人たちにとって大切な価値あるものすべてから、それは何とも遠いところへ私を連れて行ってしまった！ 幾度も幾度も深い、誰にも告げられぬ孤独な至福を私に与えてくれ、同時に苦しみと分裂の深みまで私を引き込んだのもこの魔法の声だ！ 私たちが現に生まれついた境涯より、更に高い生、更に高貴な人のあり方を囁きかける危険な声だ！ それは私をあらゆる現実との不和と闘いへ導いた、二度と癒えるべくもない、氷のように冷たい孤独へ、自己侮蔑のもたらす醜悪な地獄の数々へ、敬虔な思いを宿した神の如き不羈の姿勢へ。そして私が今日、自分の生の重圧がつのつてく

る中、フモールへ逃れ、いわゆる現実を道化の側から眺める時、ひとつの中間段階の短い間に過ぎないとしても、それはまた、あの聖なる声への肯定であり、その声と現実の間の深淵に、理想と経験世界の間に瞬時、儂ない束の間の橋を幾度も渡そうという試みに他ならない。たしかに、悲劇とフモールは対立物ではない。と言つよりむしろ、一方が他方を必ず要求せずにはいないという、まさにそれ故にこそ、対立物なのだ。

翌朝、遅い朝食をすませると、小都市トウツトリンゲンは明らかに魔法を失っていたが、それは単に私の責任でも、また、朝の時間には世界から何も引き出せないという私の能力不足のためでもなかった。確かな証人が何人も確言してくれているが、トウツトリンゲンは全体において、どちらかと言えば味気ない町といつて良い。だから気になったというわけではないけれど、それでももう一度、あの破風屋根のある水辺へ行ってみた。すべてはそのままの場所にあった。ただ、月と、あの夜の時間の恩寵はなかった。ならばつまり、まさにふたつとない瞬間に、トウツトリンゲンが神秘に満ちたメルヒエンの街に変じた、限りなく稀な恵まれた時に、私はやって来ていたわけだ。さて、ここを去るのは辛くない。軽食のパンを買い、プラットホームへ運ばせた私のシャムのトランクを見つけ、満足の思い

で列車に乗り込んだ。美しいドーナウ渓谷を抜けて走る日曜日の満員の列車だった。ボイロンの、そしてヴェーレンヴァークの家並みが、晴れやかな陽光に照り映えていた。列車を降り、こうした魅力ある土地へゆつたりと歩いて行きたくてたまらなかったが、昨日、私が来なかったためにがっかりしているブラウボイルンの友人が到着を心待ちにしているとわかっていたので、思いとどまった。列車は濃い霧に包まれた。ある谷のカーブを抜けると、突然、青空と太陽が消えてしまっていたのだ。駅舎の地名もほとんど読み取れないほどだった。まだ午後早いうちに着いたブラウ渓谷も灰色の霧だった。するときつかり一分遅刻して、懐かしい友人が広い殺風景な道を走って来た。この道の彼方に小さなブラウの谷と数々のブラウボイルンの神秘があるのだが、駅前の味気ない通りを見る限り、そのかけらも感じられない。向き合っただけでも、お互い年齢を重ねて素敵になったわけでもない顔を私たちは眺めていた。今思うに、二人とも心の底から本当に嬉しかったのだ。少なくとも、ここ二十年來、幼い頃の故郷からずっと遠く離れて暮らしている私には、少年時代を共にし、私を学校のあだ名で呼んでいた人間、隠しだてなど何一つしようなない人間がまだ実際に何人かいると、時々、折りに触れ確かめると、大層心地

よく、また心温まるのである。それに、少年のころ知っていた人間が全く変わらないのを確認するのは、いつもなんと感動的かつ滑稽ではないか！ この友人の場合、そうだった。私たちの友だちつきあいは十四才の時に遡る。そして私の頭の中の彼は、その頃の顔のままだ。だから今、彼が歩くには何やら教授らしい、思慮深げな、ゆったりとした足運びを見せ、立派な口ひげをたくわえ、頬は少々たるみ、髪には灰色をのぞかせはじめているが、それを皆合わせても、私の眼をごまかしたり、私を恐れ入らせたりはできやしない。こいつは墓場まで私の学校仲間であり続け、私にとって十五才くらいのみまだらう。そして、彼から見れば私もおそらく同様である。それを再確認するのは良い気持ちだった。私たちは素っ気ない通りを谷の方へ行進していった。すぐに話に熱中した。するといつの間にか、木組みの破風や鷹揚な風の屋根をもつ、古い、重々しい風情の家ばかりのみことな小市街に入り、そこをまた抜けて、静かな修道院地区に着いた。ここで突然、また麗しのラウを思い出した。友人にラウの物語と尼僧院の地下にあるラウの石造りの水場について話し、この地下室と水場を見るのが自分にとってブラウボイレンの最重要事なので、都合の良い時に連れて行ってもらいたいと頼んだ。しかるに我が友は、地下

室と水場のことは何も知らなかった。すると私も、あれはメーリケのしゃれた創作に過ぎないのかと疑わしくなってきた。そうしていると私たちはある人に出会った。何とそれは、修道院の管理人であった。この人は同時に聖具室係であり、ブラウボイレンの貴重な品々に通じ、また、それを大切に保管しているのである。今度はこの人に自分の用件を話した。メーリケの物語の情景を詳細に描いてみせた。すると彼の顔が輝いた。わかりました、その地下室は実在します、地下の水脈がそこブラウトツプを結んでいます、では時間ができ次第、ご案内しましょう。私たちは翌日の会う時間を定めた。それから私と友人は、この友が住むかつての修道院に入った。奥さんが迎えてくれ、すぐに、私のために用意してくれていた昼食の席についた。シュヴァーベン風じゃがいもサラダと軽快で美味なベーシグハイムのワインである。これでようやく私はシュヴァーベンに着いたので、故郷にいるのである。自分も再びシュヴァーベン方言を使っている。もう旅の途上の紳士ではなく、同朋である。もう間抜けな隠者ではない、あれこれと尋ねられ、また、色んな消息をもらったのだ。同級生たち、以前の先生たち、その息子さんたち、娘さんたちについて。私が学んだラテン語学校の校長先生の息子さんは教授で、この修道院で会える。もう一

人の学校友達は明日、来る予定だ。村の牧師になっており、息子がここで学校に通っている。私は私の宿主を眺めてみた。食事をするにも大きな髭をぬぐうにも貫禄があり、奥さんには重々しく手短に話をし、眼のあたりに小じわがある。だが、どうしたって、ごまかされはしないさ、私にとって奴は少年のヴィルヘルムなんだ。

ブラウボイレンでは二日、建物としては総毛立つようなものであっても、しかし私には大層去りがたくなつた、修道院の新しい増築部分に泊つた。いつも気分が良かったわけではない。夜は眠れず、気持ち乱すありとあらゆるものを感じた。これからのウルムのことを思うと不愉快になり、南の方の我が庵に思い馳せれば気がふさぎ、定まつた役職と理性的な職務と日々果たすべき務めを持つ友人を見て、しばしば、無責任な羨望を抱いた。——しかしこんなことはすべて、ただの添えものであり瑣事だつた。他のすべてが途方もなく大切であり、美しかったのだ。修道院附属学校の生徒たちと二三度会つた時は楽しかった。彼らにとつて私は一種の珍獣の類だつたのだ。なぜなら、十五才の時、入学して少ししか我慢できずに修道院を逃げ出した私は、自身、かつての修道院附属学校生として、こうした施設に伝わる悪漢列伝に今も少々記憶されてい

るのである。とは言え、これはどうしたことだろう？ 屈託のない、つるんとした面立ちのこの可愛らしい若造さんたちは、かつて修道院学校生だつた頃の私たちと本当に同年齢なのだろうか？ このおでこと金髪のおつむの中に、かつての我々と同じ、様々の御し難い問題が、同じ矛盾対立が、同じ哲学熱が、同じ燃え立つ理想がうごめいているなど、あり得るだろうか？

私の友人の考えも、今日のこうした青少年は（修道院での彼らの生活が私たちの時より随分楽になっているのは事実だ）あの頃の我々に比べて遙かに問題を持たず、楽に生きていると、こうだつた。しかし、そんなことを口にしてしまうと、我が親愛なるヴィルヘルムはもう十五才ではなくなつていた、私もそうだつた。私たちの目のまわりには、たくさんの皺があつた。そして髪の色がはずかし気もなくしゃしゃり出ていたのである。

ブラウトツプへの最初の散策は美しかった、これは述べないわけにはいかない。張り出した樹々の下、メルヒエンのような水に黄の落ち葉が浮かび、堰や小川にはいつぱいの鷺鳥と家鴨、水底深く麗しのラウは座し、青い微笑を水面へ投げかけ、傍らにはかつてのある王の、感動するほどに滑稽な記念碑が寂しく瀟然と立っていた。すべては故郷の、シユヴァーベン方言の、

ライ表バンとメルヒエンの匂いを放っていた。そして私にはまた、すばらしく生氣のある、最高に個性的なこの地の風情が、なぜかくも最近のドイツの画家に知られていないのか、不可解に思えてきた。いたるところにラウが隠れていた。いたるところ、青春と幼年の香り、幾多の夢とレーブクーヘンと、また、それに劣らず、ヘルダーリンとメーリケの香りを漂わせていた。だから、ここに二人の詩人の記念碑がないのを私は残念に思いはしない。それは理解できる。シュヴァーベンには常に王より詩人が多かったのである。

そして我らが尼僧院地下室訪問！ 我らがガイド氏に導かれ、私たちは古い階段と地下へ通じるほどの暗い円天井を抜け、美しく堅牢な壁の、天井の高い地下室へ入った。ガイド氏が東西南北を指し、そして地下水脈の流れてくる方角を説明した。待ち切れなくなった私が水場の場所をきくと、彼は懐中電灯で厳かな空間の一隅を照らした。すると、毎度ながらの壘行がひとつ、姿を現した。つまり、セメントで塗り固められているのだ。まだ、かなり新しい。セメント表面の滑らかなこと！ ここがつまりはラウの水場！ この忌むべきセメントの一角の下、湧き出す神秘の涼やかな水に、あの美しい姫は現れたのだ、胸まで水に浮かび漂いながら！ 幸い、ここの建築芸術家たちは、お情け

でセメントに丸い穴をひとつ残り、これもまたセメントの蓋をかぶせていた。私たちは蓋を引き上げた。すると射し込む弱い光の中、暗い水がほのかに揺らめいていた。ものも言わず、私たちは再び穴をふさいだ、はずかしめを受けた遺骸を覆うように。

今日のシュヴァーベン人も他の人間も一体、本当に神々から見放されてしまっているのか、ラウやメーリケや、他のドイツのどの地方よりシュヴァーベンに豊かなこうしたすべての奇蹟の意義を、彼らは本当に知らないのか、私たちはこのようなことは話さなかった。この込み入った問題は不問として、ブラウポイレンにまだ残っている古い宝物やセメントで封をされていない遺産をすすんで楽しむようにした。幸い、それが大変多いのである。すべてに詣で、愛情をこめて丹念に見た。有名な祭壇、聖務共唱席、吸い込まれるようなアーチ、集会ホール、墓碑。そして夜、十五分にも満たない浅いまどろみの間に私が夢に見たのは、水場へ泳いで来てセメントの蓋に頭をぶつけるラウではなく、遙かにずっとすてきなものだった。これは誰にも打ち明けようと思わない。ところで、今より神を重んじていた時代の数々の逸品を見てしまっても、私たちが友人にとつてブラウポイレンは、まだまだおしまいというわけではなかった。一種の中世があったのだ。それは

私たちには、貴重な品々に比べ、より身近であり、また、劣らぬ魅力を有していた。私たちの少年時代である。さて今度は、私たちはあの伝説的な時代の聖遺物を手に取った。幾葉ものこつけない、懐かしいクラスの写真（既に脱走していた私は写っていない）。生徒たちの教室、寝室、そして食堂。それに殊に思い出のある仲間たちの手紙。あの時、アルテンブルクはツヴィツカウ通りの友人たちは、さぞかし耳がむずがゆかっただろう。

経験から判断するに、シュヴァーベン神学者や文献学者には、列車に乗るに際し、遅刻しながらも、どうにかぎりぎり間に合う傾向がある。中世が驚くほど早く過ぎ去り、自作朗読会のためウルムへ赴かねばならなくなつた時、私たちも同様だつた。危うく乗りそこなうところで、おかげで、あれこれの別離の儀式をしないですんだ。夕闇迫る頃、私はウルムに到着した。

さて、今、気付いたのだが、バーデンで過ごした間の小さな経験をお伝えするのを忘れていた。つまり、あそこの診察室で、ある日、ウルム在の人と知り合つたのだ。その人が、ウルムでは彼のもとへ宿泊するよう招待してくれていた。そんなわけでプラットホームにその人が立っていた。彼のとなりには、おまけに、

かつて二十年以上前、この町を初めて案内してくれた私の知人がいた。心地よい住居に私は通された。子供たちがいる、愛すべき人たちがいる。見知らぬ土地ではない。私はまだシュヴァーベンにいたので。その一方、義務遂行の時がきた。着くや否や、着替え、自分の朗読について考えねばならなかった。そして、気が乗らなかつた。どうしてなのか、その様々な原因を今でも完全に認識できるわけではないけれども。しかし、このような因果の糸の自分にわかるものだけでも可能な限り整理する手間を、私は厭うてはならないのだ。

公の朗読会に対し私が抱いている気分は、一人で暮らしている者が人中之の催しごとに対して覚える、場合によつては克服が容易な気おくれだけではない。私はここに、心の深部に根をおろした、原理的な不整合や分裂と直面するのである。それは、余りに手短かな言い方だが、文学全般に対する私の不信に起因している。こうした不整合や分裂が私を苦しめるのは、朗読の際だけではない。ペンを手にしている時はずっとひどい。私たちの時代の文学の価値を、私は信じていない。それぞれの時代がその文学を持たねばならぬ、その時代の政治、その時代の理想、その時代の流行を持たねばならぬと同様にその文学を持たねばならぬ、これは確かにわかる。だが、私たちの時代のドイツ文

学は、永続し得ぬ、絶望的なものである、手入れの悪い痩せた土に育った苗、興味を惹き、問題性に満ちてはいるが、およそ成熟した、豊かな、永続する成果を生む力はない種であるという確信から私はどうしても抜け出せないのだ。それ故、今日のドイツ語圏の作家の、本当の形象化、真の作品を目指す試みは（無論、私自身のものも含め）、常に何かしら不十分な、物まねめいたものとしが感じられぬ。つまり、いたるところに、でき上がってしまった型が、生命を失った手本の影が見えるように思える。これとは逆に、一種の過渡期の文学、安定を失い問題となった文芸の価値は、自分の苦境とその時代の苦境を告白というかたちで可能な限り率直に言い表す点にあると私は見ている。今日の作家の美しく誠実に仕上げられた多くの作品をもはや楽しむことも是とすることもできぬ一方で、最も若い世代の、全く粗削りに、一切の顧慮なく自己を表白した少なからぬものに、まさに無条件の率直さを目指す試みとして共感を覚えるのはそのためである。更にこの分裂は私自身の小さな世界と文学の中心を貫いている。私は最後の偉大な時代、一八五〇年までのドイツの詩人を愛している。ゲーテ、ヘルダーリン、クライスト、ロマン派を心の底から愛してやまない。彼らの作品は私にとって不滅だ。幾度もくり返しジャン・

パウルを読み、ブレンターノを読み、ホフマン、シュティフター、アイヒェンドルフを読み、同じように、くり返しくり返し、ヘンデル、モーツァルト、そしてシューベルトまでのドイツ音楽すべてを聴く。常にこうした作品は完璧だ、もうとっくに私たちの感情に訴えかけぬようになっていた箇所でも。それは形成物として完成しており、時間の外にある。少なくとも今日の無数の人間にとっては今もなお、これらの作品から私は文学への愛を学んだ。その調べは私にとって大気や水のように自明である。その理想は私の青春時代、常に私の傍らにあったのだ。だが、もう何年も前から、この優美な模範を模倣するのは無駄であると（くり返しそれを何の望みもなく試みずにはいられぬにしても）、重々自ら承知している。私にはわかつている、今日の我々の書くものの価値は、そこで現在、並びにその後の長い期間に互り通用するひとつの「かたち」、ひとつのスタイル、ひとつの古典が生まれ出る可能性があるという点にはあり得ない、そうではなく、我々が自らの苦境にあつて逃れうべき場所が可能な限り最大の率直さ以外にないという、ここにしかないのだ。率直さ、告白、徹底した自己暴露の要請と、美しい表現という若い頃から馴染んできた、あの別の要請の間……この二つの要請の間を私の世代の全文学は絶望的に揺

曳している。何故なら、意を決して、自己放棄へ到るほどの究極の率直さを目指すにしても……その表現を我々はどこに見出せば良かるう？ 我々の書物の言葉、我々が学校で習い覚えた言葉はそれを与えてはくれぬ、我々の筆跡はとうの昔から型にはめられているのだ。二・チエの「この人を見よ」のような、散発的に現れた、絶望に満ちた幾冊かの書物が一本の道を示しているように見える、しかし、最終的により明瞭に示されているのは、道がないということだ。我々には、精神分析がひとつの補助手段であるかに見えた。そして、それはいくつもの進展をもたらした。だが、この種の心理学を余りに狭隘な、余りにドグマティックな、余りに高慢なアカデミズムのその鎧から解き放った作家は、精神分析の専門家であれ、精神分析の訓練を受けた詩人であれ、今日までまだ一人もいない。

これでよし、問題の輪郭を描くにはこれで十分だ。さて、私がもの書きとして、自分の書いたものを朗読すべく招待を受け、原稿を片手に壇上に立つ時、この問題は私の前に凝縮したかたちで立ち現れ、手に持つ数葉の紙を使いものにならぬ反古と変え、美しさを顧慮しない率直さを求める私の追求欲を、二倍に燃え立たせる。本当ならそんな時、灯りを消して、聴衆にこう言いたい、「読み上げるほどのものは何もありません

んし、どうにかして嘘をつかずに済ませたいという以外何もお伝えすることはないのです。心中、御推察願います。で、家へ帰るとしましよう」

この障害があるにしても、断りきれずに引き受けた数少ない朗読会を、ほとんどすべて、主催者がどうか満足する程度にはやり遂げてきた。だが、人前で一時間朗読するという小さな努力がひどく人間を疲れさせ、往々、立つていることすらできぬほどに消耗させるのに私はいつも愕然となった。

仮に、ある抽象的もしくは理想的な詩人が抽象的もしくは理想的な聴衆と向き合うという情況が生じるとするならば、事はおよそ立ち行かないだろう。その場合、情勢は純粹に悲劇的であり、結末は、詩人の自己抹殺が聴衆による詩人への投石刑以外、あり得ないだろう。しかし、経験世界では、すべては若干異なつた様を見せる。ここには少々ズレならば許容するあそびがある。ここには何よりも、理想と現実を昔から仲介して来たもの、フォームを容れる余地がある。このようなタペに私はフォームを多く用いる、あらゆる種類のフォーム、特に進退きわまつた絞首台上のフォームを。純粹な光線の屈折、現実へのこの哀れな順応を、同じく、短い公式に纏めてみよう。

つまり、心の奥底では自分と自分の詩人としての勞

苦の価値を疑っている詩人が、こちらはこちらで朗読者先生の胸中の込み入った事情などケシ粒ほども感じ取っていない、満場の聴衆の前に立っているわけである。この時、当の詩人に、逃げ出して首をくくる代わりに手にした原稿をそれでも読み上げるよう可能とするものは何か？ それを可能とするのは第一に、詩人の虚栄心である。自分自身ばかりか聴衆も真剣に受けとめ得ない一方で、詩人にはやはり虚栄心がある。何故なら、いかなる人間もそうであるから。禁欲苦行者も、自分自身を懷疑する者も。諸氏の歡心を買わんがために、こう言つのではない。それに、必要となれば自分の人格を捨象する能力において、私はヨーロッパ一般のレベルを超えていると思つてゐる。我々の内なる永遠の自己が死すべき自我を眺め、その有頂天やら洪面やらを同情を込め、嘲りを込め、また、中立のまま査定する状態を私は、不特定多数の誰かさんよりも良く知つてゐるのだ。さもなれば、知るにおいて私に及ばない読者の嘲笑に、どうしてわざわざ自分の自我を提供しよう？ しかし、この点において私が幾分、平均以上に知つてゐるからこそ、時には耐え得る限界まで知つてゐるからこそ、だからこそ、私は詩人の虚栄心を多分に冷静に計算に入れることができるのだ。虚栄心は、思索の天分を与えられた人間にあつて一般

に思われていると推察される以上に大きい。しかし、思索の才と虚栄心は相容れないという見解は、誤りではない。逆である。当の精神的人間ほどに虚栄を欲し、反響と是認を得るに汲々としてゐる者はいない、そして事実、彼には反響と是認が切実に必要なのだ。私の方が他の詩人より虚栄心が強いわけではない、虚栄心の馬力は人それぞれに差があるけれど、この虚栄心が、私の側に何ら与えうるものはないのに、あちらでは何か私に期待している聴衆を前にした絶望的な情況で、私を助けてくれるのである。私の中の何か、三分の二は虚栄心で構成されている何かが、ホールに集つたこの人々に屈伏して己が無価値を認めるのに抗うのだ。私の中のこの何かが、何らかの行動を起こさせようとか、ましてや喝采に駆り立てようなどというのでは決まてないが、注目するよう、私の思想と詩を、その意図と意味が聴衆の意図と意味とは正確に対立している思考と詩を静聴するよう、この人間集団に強制するのを、私にとって望ましいものとして現出させるのだ。かくして私は大層気ばり、歯を噛みしめ、それに精神に関わることなら常に個人は集団より強いのだから、闘いに勝つのである。私は傾聴され、実際に言うべきものを持つてゐる男だという印象を呼び覚ますのだ。これが、きつかり一時間遂行される。それから

私は止めざるを得ない。疲労困憊なのである。

だが、経験世界という不透明な領域にあって私を助けてくれるのは、私の愚かな虚栄心、つまり、自分の価値を認めさせたいという私の人格の、動物的ではあるがそれでも気の利いた欲求だけではない。聴衆と、聴衆に対する私の立場も力を貸してくれる。多くの私の同業者たちに比して私が勝っている点がここにある。つまり、聴衆それ自体は私にとつてどうでもよいのだ。仮に聴衆と私の間にきわめて不愉快なことが出来ても、私が全く完全に失敗し黒倒されても——私は特段意に介さないだろう。私の内なる誰かが一緒に盛んにヤジを飛ばすかも知れない。そう、ホールに座っている人間たちに私は不安を覚えないうし、また、彼らに多くを期待してもいない。もう駆け出しではないのだ。事情はよくわかっている。こうした聴衆の内のどれくらいが後で私に面会を求めたり手紙をよこしたりして、プライベートな、全く利己的な用件を押しつけてくるか、私はかなり正確に知っている。有名人にペコペコしながら、うしろで毒を吐きかける手合いはわかっている。有名人の威光にあずかろうと、最大の誉め言葉を使つてはさし気もなく面と向かつて誉めそやしなから、お世辞もお追従も甲斐なしと気づくや、くるりと背を向ける手合いは知っている。また、「世に知

られた人たち、精神世界の人たちだつて人間だ。おかしな所を持つてるよ。自惚れもある、偏見もある」と得心したがる、器の小さな人間のほくそ笑みも知っている。こんなことはみな、おなじみである。もはや私は、自分ゆえに、自分の非凡なる人格ゆえに、ここにこの人々は参集したのであるなどと自惚れる青二才ではない。私にはわかっている、ヨーデル四重奏団でも変わりはないだろう。ルーデンドルフの演説なら百倍も、ボクシングの試合なら千倍も人寄せになるだろう、私にはわかっているのだ。それに私個人は、私自身は、市民社会の外に生活し、ただ一時の客として人と関りを持つのみなので、この社会での成功や尊敬に（他ならぬ私の抜き難い虚栄心に引つ張り込まれない限り）私は無関心たり得るのである。この点、私は、アウトサイダーであり、隠者であり、常に一方の足をインドに置いて暮らし、与えられるものも奪われるものもあるうはずがない人間のあらゆる強みを私の側に有しているのであり、また、この強みを自覚している。しかしながら、きわめて強い抵抗感や気詰まりがあつても、その都度、朗読会をやり遂げさせるものは、単に虚栄心から生まれる推進力や聴衆に対するアウトサイダーの無関心のみではない。幸い、別のものがまだそこにはある、より良いもの、存在するものの中で唯

一、良いもの、つまり愛だ。聴衆への私の無関心について述べたことすべてと、これは矛盾するように見えるが、それでもそうなのだ。つまり、経験から生まれる例の術策、経験から学んだ、聴衆に対する例の低次の、いくらか卑劣な無関心によって自分を護る一方、それだけに一層大きな愛を、一層心をこめた努力を個別の人たちに向けてるのである。私が愛し得る人、その人のためなら努力を厭わない人、こうした個別の人間が実際にホールに座っている場合、例えばひとりの友人という形でもよい、私はただ彼だけに向き合おうのだ。私の全朗読をただだ、このひとりの人へ発するので。そうした人がいない場合、あるいはそうした人が来ていると私が全く知らない場合、その時にはそれでもそういう存在を思い浮かべる、魔法を使つて眼前に現れさせる。遠くにいる友人や恋しい人や私の姉妹や私の息子のひとりのことを考えたり、またあるいは、ホールの中の、好意を抱けそうな顔を引き上げたりもする。この顔にしがみつき、それを愛し、その顔に私のすべての心の温もり、私のすべての注意力、理解を得るための私のすべての努力を向ける。となれば、これが私を助けてくれる護符なのである。

さて、ウルムの場合、この件は困難ではなかった。好意のある見知った顔がホールに幾つかあっただけで

なく、全体において私は友人たちの中にいた。シュヴァーベンに、自宅にいた。こうなれば難しくはない。会場はとても素敵な市の博物館だった。この館長が今回の催しを企画したのである。彼は、翌日、博物館を見に来てくださいと招いてくれた。また、他の数人と一緒に、私が泊っている友人の家にもやってきた。一杯のワイン、それにもう少し一緒にいたいのだ。私が読み上げた多少問題を訴える事柄の良からぬ余韻が尾を引かぬようにと言つわけがな。私はひどく疲れていた。そして同様に、まず一段落したのが嬉しかった。

これでは二日がウルムのために残されていた。そして、美しいものの記憶とは、そのための素質に恵まれ、また、そのための教育も受けてきたと自負する人にあつても、疑わしいものだと確認できた。若い時、既に一度、この並外れて美しく独特な町を見て回っていたのに、またたくさんのものを忘れてしまっていたのだ。市壁や肉屋の塔は忘れていなかった、ミュンスターの内陣や市庁舎も。こうした映像は皆それぞれに私の記憶の像と出会い、ほとんど違つていなかった。これに対し、初めて目にしたかと思えた新しい映像が無数にあつた。暗い水に傾き朽ちかけて蒼古と立つ漁師の家並み、旧市街を囲んでいた墨壁上の小さな小人のような家々、あちこちの小路の広壯な都市市民

層の屋敷、ここには風変わりな破風屋根、あそこには品の良い玄関。だが、既に名を知られ、分類済みのものには最早さほど感心しなくなっている私は、からくり箱をのぞき込むような昔からの楽しさを覚えながら、更にここでも大量のささやかなものを心に取り込んだ。一匹のポロニア犬、半分ほどカーテンを下ろした窓ガラスの向こうの色々なシユヴァーベンの人たちの顔、絵葉書屋に積まれた、もう少々クリスマススの雰囲気を漂わせている小物、そして——私にとって常に魅力あるもの、見飽きぬもの——店の看板。知らない街で商人や職人の個人名や家族名を読むのは、私にはひとつの欲求であり楽しみである。これまで読んだ小説でも、名前は私にとつていつも重要であり、よく様々のことを示唆してくれた。また、文学作品の中でしか知らなかった名前前に現実に出て会った時は、どんな時でも不思議の感を覚え、それはひとつの経験となった。それ故、かつて何年も前のこと、エルザスでアルボガストというこのメールヒエンのような、美しい名前に出会った時、それは小さな衝撃だった。私はずっと、メーリケがその美しい小品「宝もの」のために自ら創作した名前だと信じていたのだ。商店の屋号から読み取れるのは、その町の住民のカトリックやプロテスタントの比率やユダヤ人の多寡のみではない。特にカト

リック系の個人名の場合、一定の住民の精神や出自、その好み、その守護聖人のことも幾らかわかる。更に、いたるところ、故郷の力強いシユヴァーベン方言が響いていた。長年耳にしなかった言い回しがいたるところで聞こえてきた。「そいではあ」とか「でねえかなはあ」という類だ。これは追憶の世界の石灰岩や砂岩、樹々や花々に、どこかでまた出くわした時のようなもの、水や葡萄酒、料理、林檎、葉の味を突然、また口に覚える、あるいはもう何年間も出会わなかった、そして何千もの名前のない思い出が結びついている匂いを鼻にする時のようなものだ。こうした空気の中へ、無名の幾多の思い出の雲の中へ私は踏み込んだ。ウルムの笑話や物語に耳を傾け、その合間に私は、泊めてくれている友人の子供たちに囲まれて、昨日朗読したメールヒエンを見せた。自分で描き彩色した小さな挿し絵入りの手書き本である。——インフレの時代、こうした自筆本が私の生計を助けてくれた。ある午後、私たちはバウム教授のウルム博物館を訪ねた。十分に見る価値のある博物館である。

青年時代、最初にウルムを案内してくれた例の知人のもとでは、美しく珍しい品々にあふれた気持ち良い小部屋でコーヒーとケーキを御馳走になった。私はここで再び、メーリケと強い関りを持つようになった。

知人はメーリケにゆかりの品々を大量に所有していたのだ。メーリケがメモを書き込み、氣に入つた箇所には線を引いた書物があつた、翌春、庭にまこうとしていた種についてのメモがあつた（野菜はごく僅かで、花が大変多かつた）、粗布に刺繍が施された、大層古い旅行カバンが現れた。牧師メーリケ氏がかつて旅行の折りに用いた品である。この家にはいくつもの小さな宝物があつた、そして、それぞれ、ふさわしい場所に置かれていた。この家に入つた時、疲れ果て神経質になり弱り切つていた（何故なら、ただでさえ本當の意味で調子の良い時はほとんどのないのに、旅行中はそれがさらに悪化するのだ）のに、たちまち氣分が和らぎ、心地よくなつたのだつた。

ウルムの最後の夜、床に就きながら、ここまでシュヴァーベンの旅で出会つたあれこれを思い起こした。ジングンのこと、トゥットリンゲンのこと、ブラウボイレン、ウルム、あの美しい博物館のことを考えた。すると急に奇異の感を覺えた。こうしたすべてが何と強く過去の徴を帯びていたろうか、そこで一緒に語りかけていた死者たちの多かつたこと、いや、すべての中でもっとも生き生きとしていたのは死者たちだつたのだ。トゥットリンゲンの切妻屋根の家並みでのあの瞬間、それはヘルダーリンだつた。麗しのラウと共に

あつたのはメーリケだつた。ここウルムではしばしばアルニムと王冠守護団のことを思い出している自分を感じていた。祭壇、聖務共唱席、墓標板、壮麗な建築すべてを作つた名工たちがいた。ならば、この旅の間と同様、私を取り囲んでいたのは、どんな時でもどんな所でも死者たちだつた、いや、むしろ不滅者たちと呼んだ方がよい。そしてその言葉が私には生きており、その思想が私を育み、その作品あるが故にこの味気ない世界が美しく、生きていけるものである、こうした世を去つて久しい人々——一体彼らは皆、やはり特別な、病的な、氣難しい悩める人々ではなかつたか、幸福ではなく苦痛を糧とした創造者、現実との一致ではなく、現実への嫌悪を原動力とした建設者ではなかつたか？ つまるところパン屋や商人であり、裕福で健やかで満足した人々だつた中世の市民たち、本當に彼らがこうした大聖堂を建てたのが、それを望んだのか？ 別様の人々、ごく少数の人々の不満によつて、そうするよう強いられていたのではなかつたか？ それに現実が正しいのならば、我々のような人間が単に哀れな神経衰弱症患者に過ぎぬのならば、市民であり一家の主人であり、税金を納め商いを営み子供を作る方が、より正常で優等であるのならば、工場や車や事務所が本當に人間にとつて正常な、眞実な、ヒトとし

てあるべきものであるのならば——何故彼らはあんな博物館をつくるのだろうか？ 何故彼らは、ブラウホイレンの祭壇を維持するため、聖具室係を雇うのだろうか？ ガラスの展示ケースいっぱい素描やデッサンを何故彼らは展示し、そのためにわざわざ国が費用を支出するのだろうか？ 慰めに飢えた芸術家連のこうした愚行の産物、こうしたおふざげ、こうした病んだお戯れを崇拜し、収集し、管理し、展示し、それに関する講演を行うのは何故か、もし、こうした気なぐさみに本質的なものの、意味の、存在の本来の価値の一片がないのならば？ ウルムの市民が古びたガラクタを取り壊して工場や団地を建てる代わりに、自分たちの古い街並みを保存していることを誇りに思っているのは何故か？ 工場主たちが、自分の事務所や自分の車を離れて少しばかり気持ち良くなりたいたい時、そこで稼いだ金を使って古い修道院を扱う挿画入りの本や物故した巨匠たちの絵を買うのは何故か？ この巨匠たちは生前、自分で描いた一枚の絵に今日つけられる値段の百分の一すら決して手にしはしなかったのだ。この地ウルムで、現代のあるモダンな建築について耳にした最大の讃辞が、古い通りの風景に実にしっくり合っているというものであったのは何故か？ そして、今日作られているすべてが、かくも醜くならざるを得な

いのは何故だろうか？ チューリヒからウルムまで、地球が人の手によって変えられ、その産物で覆われている限り、そこには古い建築物がつくる、いくつかの小さな島以外に、美しいものは何も無い。他のものと言えば、駅、工場、団地、デパート、兵舎、郵便局で、どれもこれも醜悪で絶望的だ。人間に吐き気を催させ、自殺を説き勧めるに適している。この醜悪さと絶望の原因を探るため、問いかけようとは思わない。人口増加（国や社会はこれを奨励するより、あらゆる手段で抑制すべきだろう）も経済法則（ゴシックの大聖堂が建てられていた時代もそれは今日と同じようなものだった）も私は興味がない。私を縛りつけて放さないのは唯一、この問いだ、「旅の狂える詩人よ、おまえは本当に狂っているのか？ おまえが病み、生きるのに苦しみ、しばしば、もうほとんど生きていたくなくなるのは、現に確かにそこにある 現実自ら適応するのを怠ったためだけなのか？」

すると、自分のことを度外視してでも即物的に考える心構えはあるにしても、私はまたもや、これまで幾度もくり返した答えを出さずにはいられない、「ちがう。この厭わしい 現に確かにそこにある 世界への抗議において、おまえは千倍も正当である、この世界を承認せず、この世界の故に窒息死するならば、おま

えは正当である」と。

そしてまたもや、ひとつの極とその対立極が引き合い、震えるのを私は感じるのだ、現実と理想、現実と美を分かつ深淵にたゆたう儚ない橋、フモールを感じるのだ。そう、フモールがあれば、耐えられる、駅舎でも、兵舎でも、文学朗読会すらも。笑いながら、現実を受け流しながら、現実には破壊できるものだと言に意識しながら、耐えて行ける。いつか、狂った機械が相互に破壊し合うようになるさ、兵器庫が自分のガラクタを爆発させるさ、そしていつの日か、今日、大都市のある場所に草が生え、イタチやテンが音もなく歩き回るだろうさ。そう、真面目に受けとめてやるなどという敬意を、このおかしな世界に払うには及ばないのだ。

翌日、食事を済ませ、別れを告げ、再訪を約し、列車に乗りこんだ。さて、今夜九時すぎには二つめの朗読会が終つて、数日、私は自由だ。ああ、この駅というものは！ この汚れた薄暗いホール、慌ただしく駆けたり荷物を引きずったり、不安気な人間だらけのこの階段、この阿呆くさい改札口、鼻眼鏡をかけ切符を集めている男の入った、この貧相な小屋。受け流しておけ！

アウクスブルクのホテルの送迎バスは私を、あるガ

ラスの回転扉の前に下ろした。ドアの向こうでは軽い音楽が流れていた。きょう日の人間のこのしゃれた発明。安息と回復のわずかな時間にすら、話をしないで良いように、話を聴かないで良いように、考えないで良いように、我に帰らないで良いように。名前を告げ、部屋を頼んだ。ボーイがひとり、ついて来た。どこを見てもきわめてモダンだ、レストラン、ホール、クローク。エレベーターでボーイも一緒に二階へやって来た。彼が扉を開けると、突然、私は広々とした古い宮殿の中にいた。広大な沈黙の回廊、堂々と並ぶ高いドア（そのひとつひとつに彩色した紋章のレリーフが付いている）、壮麗な吹き抜け。ドアの一つが私の前で開いた。天井の高い、美しい部屋である。窓は緑のサンテラスに面している。ドイツの中規模の都市でこれまでに出会った中の最も独創的な、最もすてきなホテルを私は喜んで使わせてもらうこととした。唯一の目ざわりは部屋の電話だった。この器械は危険なのだ。まあ、どうしようもなければ、線を抜くなり、叩き壊すなりすれば良い。しかしまずはこれを使用し、今晚の芸人が到着した旨、我が食料支給主へ連絡した。その後、休息し、少し荷を解き、着がえ、牛乳とコニヤックを少々持って来させた。コートポケットに雑誌「ジンブリツイシムス」を持っていたので、そのリ

ンゲルナツツの旅行書簡の一つを読んだ。この旅行書簡が大好きなのだ。だが、それからドアがノックされ、朗読会への迎えが来ると、かなりの時間、眠り込んでいたのに気付いた。寒い夜だった。広い堂々とした通りを抜け、あるコンサートホールへ案内された。今回、情況を感じ取り、いつもの心理装置を稼働させるような状態ではまるでなかったが、それでもすぐに、聴衆の山から自分の気持ちを向けられる顔をひとつ釣り上げるのに成功し、おかげで自分の担当分を健気に読みあげ、時おり、まことにうまい水を一口飲み、すると、抗う気持ちがおよそ起こるより早く、会がすべて終了してしまった。ともかく、有難いことだ。控室へ駆け込み、コートを羽織り、煙草に火をつけた。ここで人々がやって来た。気を奮い立たせて、毎度ながらの挨拶を交わし、心の底では、この町に知り合いがないのが嬉しかった。——だが、思うや早く、頬の赤いひとりの婦人が前に来て笑いかけ、シュヴァーベンの方言でこう言った、「あれ、私に見覚えがまるでないですかいね？」シュヴァルツヴァルトのご婦人で、私の生まれた町の出だった。私の姉や妹と一緒に学校へ通った人だ。今度はその後ろから彼女の娘さんが出て来た。まつかな頬がおんなじの愛らしい、明るそうな娘さんだ。私たちは笑って、今夜、もうしばらく一緒に過ご

すことにした。しかし、私は今夜、やはり幾分ぼんやりしているのに、すぐ気付いた。ひとりの紳士が、奥さんへ献辞を記してほしいと、私の本の一冊を差し出した。ちょうどニュルンベルクのことか頭にあり、これで幸い残るはあと、この町ひとつを片づけるだけだなどと考えていた。そこでこの紳士の本に何かを書きつけ、にこやかに本を返した。読むと紳士は本を私に戻してきた。私が書き込んでいたのは、「ニュルンベルクの夕への思い出として」！これは消して書き直さぬわけにはいかなかった。私たちはそれから、軽く葡萄酒を飲もうと私のホテルへ行った。カルプ出身の女性はカルプを話題にした。私たちは思い出せる限りのカルプの人たちのことを話せるだけ話し、娘さんはそばに座って、私たち年寄りをこっけいに思っていたが、すると突然、もう一人、ノイエンピュルク出の人が現れた。私はさとした、まだ私はシュヴァーベンの真ん中にいるのだ。夜遅く、壮麗な階段を通って部屋へ上がった。そもそも、あのような朗読で日々のパンを得るくらい、わけはない。一方、私に欠けているのはパンなどではない、空気である。そしてこの空気、生きて行けるといふ空気、自分の職業と行いを信頼し満足できるという空気、この空気はアウクスブルクにも流れていなかった。この報酬ばかりは、ここでも払っ

てもらえなかつた。逆だ（そしてそれ故、神は、人並み以上の自己感情を付与するという、こうした天才的な扱いでテノール歌手やヴィルトウオーソ連を遇してくださったのだが）、例えば文学的娯楽の夕べの出演者として、テノール歌手として吟唱詩人として町を渡り歩く時は、それこそ、自分の重要性を確信して思いついて上がつている芸人どもにその正反対の現実を、お前などいなくても構わないのだ、お前の人格と得意技など何の意味もないのだ思い知らせる、まさしくまたとない機会なのだ。文学クラブの人たちがトーマス・マンや、あるいはゲルハルト・ハウプトマンを聴こうが、それがミュンヒハウゼン男爵だろうがテノール歌手ヘッセだろうが、ベルリンの教授が彼らにホメーロスを論じてみせようが、ミュンヘンの教授がマテイーアス・グリーコ・ネヴァルトをテーマにしようが、それはすべて全くどうでもよいのだ。このような得意技はそれぞれ、模様の中のひとつの線、織物の一本の糸に過ぎない。模様の名は精神産業、織物の名は教養企業体。そして全体も個々の得意技のひとつも、何ら価値を有していない。主よ、我よりフモールを失わせ給うな、しばし、なお生きさせ給え！ 更に、この年の市より意味のある、価値のある何らかの業と事柄に、我をも携わらせ給え！ 我を最も小さき僕として、ドイ

ツが今こそ国民学校を閉鎖するよう、ヨローツバが断々固々として出生率抑制に邁進するよう寄与なさしめ給え！ このような朗読への謝礼に代え、名譽に代え、甘言に代え、息ができる一口分の空気を与え給え！ 懷疑家たちは確言する、傷心のために死んだ者など未だかつて一人もいないと。空気が不足で死ぬ文士がいるなど、彼らはやはり否定するだろう。だからといって、文士と言えども、何だつて吸い込めるわけではないし、どんなガスでもどんな悪臭でも蒸留し新聞文芸欄用の記事ひとつくらいはひねり出せるというものではないのだ。

翌日は好天だった。アウクスブルクを見ておこうと外へ出ると、今日は市の立つ日だとわかった。歴史を私は一度も十分に学ばなかつた。私の知識はすべて作家たちから引き出したものだ。ブラウボイレンの様々な神秘について、メーリケを通して、現地の教授たちも知らないことすら学んでいたように、アウクスブルクについて私が持っている最良の予備知識はアルニムの王冠守護団の記憶であり、ニュルンベルクについてはヴァッケンローダーとE. T. A. ホフマンだった。ここで私がわざわざ請け合うにも及ばないが、アウクスブルクは大変美しい町だ。しかし、そこで出会った中に、とりわけ気に入る、幸福な思いを与えてくれた

ものが一つある。バター、チーズ、果物、ソーセージなどがたまらないくらいに山とつまれた週の定期市にかなりの数のお百姓たちがいたのである。だが殊に女性たち、それからそこにいる何人かの子供たちまで、皆が皆、昔ながらのそのままの民族衣装を着ていたのだ。最初に目にしたご婦人に私は嬉しさのあまり、ほとんど抱きつきたいくらいだった。古い小路をいくつもその人の後について行つた。こまかな花柄の胴着、独特のふくらみをつけた後で引きしぼつた袖、おどけた帽子……ああ、子供の頃を、カルプの家畜市を呼び起こしてくれる！ 何百もの農家の男たち、女たち、皆、一人残らず自分たちの土地の衣装をまとい、町へやって来ていた、そして様々の地区の男たち、森林地帯の、農村地帯の男たちは遠くからでも正確にその皮ズボンの色で見分けられたのだ。

アウクスブルクで過ごした最後の数時間は最も美しかった。この町では幸運だった。だから昨夜、ここをニュルンベルクと取り違えるとは、ひどく不当な所業を犯したわけである。ここで既に出会っていた好ましくすてきなものをすべてに加え、まだひとつ、思いがけぬ特別な驚きが出来した。アウクスブルクに一組の夫婦がいた。夫妻は十四年前、私の本の一冊を読み、私に手紙を書き、私の本のある人物の名前をその頃生ま

れた長女の洗礼名とした。今、この夫妻が現れ、私を食事に招待し、まず、私を選び抜きの良い食事でもてなし、それから車を使って古都アウクスブルクの最重要にして最美のものを短時間で見せようと愛情のあふれる労を尽くしてくれたのである。こうした好意と親切のすべてが今となってはとも我慢できない自分の本のおかげとは、とても恥ずかしかつたが、それでも良い時間だった。ああ、それにこのメールヒエンの町で目にした何とも美しく並外れたものの数々！ 聖モーリッツ教会の聖具室の古いミサ服のコレクションはローマにいるのかと思わせる豊かさだったし、すぐそばのチャペルに座す四人の司教は、木像や石像ではない、豊かな装飾に包まれた生身だ、ミイラだ。私が最も美しいと思つたのは、大聖堂の青銅の扉だった。しかし、この敬意を払うべき教会の内部で別の光景が私に与えられた。そこで私は、田舎風の一人の男性を見た。金色の豊かな髭をたくわえ、あせた緑の服をまとい、背にリュックサックを負っていた。初め、この男性が入るのを目にした。ちょうど私の前に教会へ歩み入つたのだ。その後、何かを捜しながら、見つけると、き回っている彼を見た。そしてそれから、見つけると、ひとつのチャペルの前に膝まついた。帽子を取り、眼は祭壇に向け、嘆願するように両の手を開き、両の腕

を広げ、そして祈った。眼と口と膝と開いた手と広げた腕とで祈った。身体と魂で祈った。世界に眼と口を開き、ここに神ではなく、ロマネスクのブロンズ像やゴシックのガラス窓を探す、聖域に踏み込んだ神を知らぬ好奇の徒たる私たちなど歯牙にもかけず。アウクスブルクで私が自分の最も奥の、消えることのない画集に取り込んだ絵は、黄金のホールでもブルンネンでも市民広場でもなく、フッゲライでもない、この祈る男と民族衣装の農婦たちである。

夕方、ミュンヘンへ向かった。幾日か、休養を取り未整理の色々な印象を落ちつかせ、まだニュルンベルクへ行かねばならぬのを愚痴る時間があった。ある晩など、私は大分、危なかつた。パークホテルの支配人を訪ねていたのだが、この人は以前、この地球の別の幾つかの場所で、私が良いワインの友であると知ったものだから、彼のセラールから選り抜きの古いヴィンテージを数本、私の前に持ちだすなどという冗談をやってくれたのだ。飲むのは好きだが、量は行けないため、終りごろには、多少頑張らねばならなかつた、しかし、どうにか持ちこたえた。すると（これがほろ酔い加減のなせる気持ち良い幻でなかつたのなら）、気がつけば、リマト河畔のバーデンの我が宿主たる友人も突如、同席し、笑って私とグラスを合わせたのだ。

また翌日は、少々教養のため、大きな新聞の編集部にも出かけた。だが、このような場所ではくつろげず、十五分以上、耐えられなかつた。しかし、ミュンヘンのことを余りたくさん書いてはならないのである。いつもかの地には、少々、良心のとがめを感じているのである。かつて私と親しく私をよく知っており、私もよく思っている人がそこにはたくさん住んでいる。本当なら、皆を訪ねるべきなのだ。だが、これはあまりの大事業だろ、そんな時、何が私を待ち受けているよう？ 三十人もの人たちが親切に尋ねてくれるだろう、お元気ですか？ 何をしています？ 生活は、体調は、お仕事はうまく行っていますか？ 等々、煩わしいばかり。で、私はおとなしく座り、愛想良く微笑みつつ首をこっくりこっくりしなくてはならない。これは恐ろしいほど疲れるのである。それでも、本当に親友だと思っている数人には会った。ただし、奥さんや子供たちのいる彼らの住居や彼らの仕事場ではない。夜、どこかのケラーが飲み屋で、しんみり私たちだけで落ちあった。経済不況を論じたり、ヴァルトウルマーやアッフエンターラーといった葡萄酒を傍らにぼつぼつと昔のことを話した。ボーデン湖の夏、イタリア旅行、戦争で逝った友人たちのこと。こうした幾日か、私の気分は特に優れていたわけではない。文学

には随分うんざりしていて、仮に、この上ニユルンベルクへ行かずに済ませられるようになるのなら、大抵のことはやっただろうが、それだけが理由ではない。別の原因が幾つかあった。

私の旅行はそろそろ終りに近づいていた。六週間かけ、テッシーンからゆっくりと少しづつ私の終着駅へ接近して来た。そして、旅の間、意識してあまり考えなかったと言つても、私の心は疑問に満ちていた。「これからどうなるのか？ 旅行でおまえは何を見つ、何を達成したのか？ おまえの仕事へ、おまえの隠棲の庵へまた戻れるだろうか？ 痛む眼をかかえ、ひとりおまえの書庫に座れるだろうか？ あるいは、何か別のことを企てるのだろうか？」そして、こうした問いはまだ相変わらず解けていなかった。私は朗読会を持った、友人たちとの親密な会話と愛情を味わった、あちらこちらで上等のワインを飲み、温かく心地よい部屋で心地よい時を過ごした。合間々々、耐えられない思いを押し殺した。古い建築物の眺めに、しばし時を忘れた（最も陶然たる思いを覚えたのは、ゴシックの網目ヴォールトだ）、また、余りにおしゃべりが過ぎた後に旅の疲れを感じた時、数度、遠い私のエルミタージュへ束の間の憧憬を抱いた……しかし、何も変わらなかった、何も整わなかった。この情況の圧迫

を私は日が経つにつれ強く感じるようになった。であるから、とうとうニユルンベルクへ向けて出立した時、私は何かを歓迎するような、何かに感謝できるような気分ではなかったのだ。それでも私は出立した、電報一本でいざござから自分を解放する代わりに、勇を鼓して行かねばならぬなどと、つまらないヒロイズムを抱いたが、さて、私はその償いをつけねばならなかった。ニユルンベルクは私にとって大きな幻滅となったのである。

出発の日は、曇もよりの暗鬱な天気だった。アウクスブルクをもう一度、通過した。街並みに大聖堂と聖モーリッツ教会がそびえていた。その後、知らない土地がやつて来た。最後の方では、荒涼たる、荒々しい、ひと気のない広大な風景が始まった。巨大なアカマツの梢を吹雪が揺らしていた。神秘的で美しかったが、南国の人間である私は、また、不安と圧迫を感じた。このまま進んで行けば（私は考えた）アカマツが増えてくるのだろう、雪が増えてくるのだろう、それから例えばライプツィヒかベルリンだ、それならスピッツベルゲンや北極もすぐじゃないか。何たることか、この上ドレーズデンへの招待など引き受けていたとしたら！ 思うだにぞっとする。あまつさえ、この旅程は長かった、恐ろしく長かった、ニユルンベルクに到着

すると、おかげで私は嬉しかった。心ひそかに私は、このゴシックの町にありとあらゆる素晴らしいものを期待していたのだ。E. T. A. ホフマンとヴァッケンローダーの霊に出会えるかと待ち望んでいた。そして、結果は無であつた。町は私にひどい印象を与えた。無論責めらるべきは町ではなく、ひとえに私である。眞実、魅力ある古都を私は見た。豊麗さではウルムを、独自性ではアウクスブルクを凌いでいる。聖ローレンツ教会や聖セバルドウス教会を見た。市庁舎の中庭のブルンネンは全く言いようもなく上品だつた。こうしたすべてを私は見た。そしてすべてがとても美しかった。だがすべては味気ない、愛のない一大商業都市に取り巻かれていた。けたたましいモーターの騒音に包まれ、長蛇の車に巻きつかれていた。すべては別の時代のテンポの下、小刻みに振動していた、網目ヴォールトを建てることはなく、ブルンネンを花を扱うように優しく静かな中庭に据える術を知らぬ時代だ。すべては、もう数時間後に崩壊する覚悟をしているように見えた、何の目的もどんな魂ももう有していないのだから。この素晴らしい都市で何とも美しく、何とも見とれてしまうようなものをいくつも見たのだ！ 数々の名所旧跡、教会、ブルンネン、デューラー・ハウス、皆ばかりではない、根本において私にはずっと好まし

い例のたまたま目にとまる小さなものも山ほど。目を保護するための新しい浴用眼鏡を買つた「クーゲル」といふ名の薬局は美しく堅牢な古い屋敷で、そのショーウィンドーのひとつに卵から出たばかりのクロコダイルの仔の剥製が、卵の殻など、他のものと一緒に並んでいた。しかし、すべては無益だつた。私が見たすべてを、この呪わしい機械どもの排気ガスが包み込んでいたのだ、すべてのものの地盤が掘り崩されていたのだ。すべてが、私には人間的とは感じられない、悪魔的の感じが感じられないエネルギーに振動していた。すべては死を覚悟していた、塵となる覚悟をしていた。崩壊と瓦解を切望し、この世界に吐き気をもよおし、目的もなくそこにあること、魂のないままに美しくあることに疲れ果て。文学倶楽部が私を遇してくれた心づかいも、私の最後の朗読会（当分はこれが最後だ、あるいは永久に）を終えた開放感も、これもまるで役に立たなかつた。すべて、慰めとならなかつた。ホテルでは熱すぎるスチーム暖房、一晩中冷やしよつがない、通りの交通がうるさくて窓を開けるなど不可能だ。それに加えて部屋にはまたも下劣な器具、電話。激烈な痛みに眠れなかつた夜が過ぎ、唯一残されていた朝の安らぎの時をこいつは奪いやがった。みんな、何故かくも私を苦しめるのだ、いっそひと思いに殺してく

れ！

その間、私の内なる観察者は、これらの全所見をいつも通り、自若として記録していた。若僧め、今度は爆発するかな、それともまだ辛抱するかなと興味津々の態で。旅行く吟唱詩人の偶然の喜びや苦しみに、それを書き留めるという以外、何も関わらぬ私の内の観察者（この物語りの登場人物には属さない何者か）、彼はここにもいあわせたのであり、この様々な経験に關し別の折りに、より即物的に語ってくれよう。今日のところは、旅行くテノール歌手だけが、偶然のことを経験し苦しんでいる、私の内の偶然の人間だけが話をしてるのである。

折りも折り、ニユルンベルクで、自分が九十才のくたばりぞこないに思え、埋葬してもらうより他に何の望みも持たなくなつた、まさにこんな土地で、私は専ら若い人たちと接触した。大学生だろうか、まだ若かつたらうか、その一人に、朗読の後で私は途方にくれた。本に何かを書いて欲しいというのである。そして私が思い付かないでいると（こんな状態で何を思い付けというのだ？）、彼は提案した、ギリシア語の文句をいくつか書いて下さい、御著書のひとつに載っていた新約聖書の引用を。私は二十年以上もギリシア文字など綴つたことがなかつた。この献辞がいかなるものとなつ

たか、神のみぞ知り給う！ いま一人、別の若い人、あの短いニユルンベルク滞在中の大部分をと共に過し、彼がいてくれるのを嬉しく思ったその人は、若い詩人だつた。しばらく前から彼は私の共感を得ていた。ひとつには、私の文学上の試みの無益さとその様々の原因を非常によく叙述した、巧みな論文のためであり、また一つには、詩人グラツペを主人公とし、本物の魔法を有している小さな作品のためである。この若い詩人は私と一緒にニユルンベルクを歩き回り、酒は飲まぬのに私と一緒に辛抱強く夕べの居酒屋に腰を据えてくれた。感じの良い面立ちと細く繊細な手の彼は、時々、このこの町で私を最悪の事態から護るべくつかかわれた天使のように思われた。

さて、ともかくも私はそこで本当にどうして良いかわからず、絶望していた。そして、ただひとつだけが明らかだつた。でき得る限り早く再びどこかへ発たねばならぬ。ミュンヒェンに友人が一人いる、信頼の置ける良い友人である。この友だちに電報を打つた、ここで我慢するのは僕には不可能だ、だから間に合う最初の急行に乗るのでミュンヒェンで引き受けて欲しい。どうにか持ち物を再びトランクに詰め、どうにかホテルを再び後にし駅に着き、くたびれ果てて、だが救われる幸福感を抱きつつ、再び列車に乗り込んで、ニユ

ルンベルクを発つた。何にせよそこは、没落に定められたと思えたのだ。列車は幸い、ミュンヒェンまでどこにも停車しない急行だった。しかしそれでも随分長くかかり、ほとんど生きた心地がしなかった。ミュンヒェンに着いた私は、九十才に老け込み、脳髓は破壊され、目は焼けるように痛く、膝には力が入らなかつた。これが私の旅でおそらく最美の瞬間だつたらう。ミュンヒェンに戻つた、また生きてゐる、何もかも終つてゐる、もう二度と朗読会をする必要はない。そしてそこには我が友が、たくましく大きな我が友が、眼に笑みを浮かべ立つていた、私のトランクを持ってくれた、そしてどくどく問いただしたり相談したりする代わりに、どことこの居酒屋でワインを空けようと知り合いたちが待つてゐると言つた。ベッドにでもへたり込んでゐる方が良いのだが、ワインも悪くないな、私は承諾した。文学や批評界の重鎮たちがひとつのテーブルについて私たちを待つてゐた。そして注がれたのは、まことに高貴なモーゼルだった。この上なく興味深い会話や論戦を耳にしながら、私は満ち足りてゐた。何故なら、こんなすべてが私にはまるで無関係なのだ、私に何一つ要求しないのだ。面白いというだけなのである、そこに座つて、上気した賢い顔また顔を眺め、モーゼルを飲み、眠気がさして来るのを覚えていれば

よかつた。それに気が向けば、明日は横になつていればよい、一日でも、一年でも、一世紀でも。誰も私に何かを求めはしない。鉄道の汽笛が私のために鳴ることもない。水の瓶がスポットライトに輝く朗読用の立ち机が私を待ち受けてゐるのでもない。ギリシア語だか何だかの文字を綴る必要もないのだ。

疲れを癒し、帰路の手順を練るため、ミュンヒェン郊外の大きく開けた田園風の土地の友人宅に私は、なお数日、逗留した。ここで私の良心が疼きだした。いや、帰宅してからが恐かつたのだ。意を決して、郵便をここへ転送してもらふことにした。膨大な紙の山が届き、捌くのに数日を要した。取るに足りないものばかりの中に面白いものもあつた。原稿を返却するよりなかつた例の若い詩人のかなり長い手紙があつた。あの時、余りに真実味のない、媚びばかりの彼の手紙に多分に不快感を覚えたのだつたが、今度はその比類ない率直さが私を嬉しがらせてくれた。そして、力と愛情をこめて選ばれた、百パーセント適確な表現を用いて彼は私に思い知らせてくれた、彼にとつて私が常々いかにチャチで愚劣で厭わしく思えて来たかを。ブラヴォー、我が同朋たる若い詩人よ、その意気で行くべし！ 語りくちの美麗な花ではない、若い文学に我々が期待するのは、率直さなのだ。

バイエルンに住む中で一番好きな友人を彼のオーバーバイエルンの村から、一晩うまく誘い出した。心のこもった楽しいあの夕べを、彼に感謝しつつ、私は決して忘れない。私人に戻った今、文学ともより素朴な関りを持った。生涯、稀にしかやらなかったことだが、幾人かの同業者に思い切って個人的に近づいてみたのである。ヨーゼフ・ベルンハルトと過ごした時間は、なかなかの収穫をもたらしてくれた。あの時の私たちほど、プロテストアントとカトリックが相互に接近し合うことはあり得ない。一夜、トーマス・マンを訪ねた。彼の態度に寄せる私の昔からの愛情が消えてしまったわけではないと彼に示したかったのだ。それに、自分の仕事をきわめて誠実に堅実にやり遂げながら、なおかつ私たちの職業につきまとう様々な疑わしさや絶望をきわめて深く知り抜いていると思えるこの男が、さて今どのような具合か、見てみたいと少々思ったのである。深更に至るまで私は彼のテーブルについていた。彼は万事、最後まで、風格豊かに進めて行つた。上機嫌に、少しばかり気持ちを含め、少しばかり距離を保ち、彼の美しい家に護られながら、彼の才知と良いスタイルに護られながら。この夕べにも私は感謝している。さて、今度は「ジンブリツイシムス」に芸人の書簡を寄せている人物、あのヨアヒム・リンゲルナッツ

にも会いたくなつた。彼は親切にも、一晩、出向いてきてくれた。私たちはラーツケラーでありとある良いワインを飲み、歓談した。これを済ませ、私は市内電車まで歩き、帰宅し、満ち足りた気分分度で床に就いたが、リンゲルナッツの仕事はこの時間あたりからようやく始まるのだ。彼はこれから、彼の言う文学キャバレーの「板切れ」の上に立たねばならない。これは羨ましいとは思わなかつた。

郊外のニコンフェンブルクでは、居心地良く日を過ごし、甘やかしてもらつた。一日中、眼を冷水につけていてもよかつたし、亭々たる古木の並木の下、散策し、何とも楽しい風に吹かれる枯葉を眺めたりもした。我らが小さき同胞たち。彼らを眺め、しばしば思いに沈んだ、彼らを眺め、しばしば笑ひもした。枯葉と同じく、私も吹かれているのだ、今日はミュンヘン、明日はチューリヒへ、それからまたあと戻り、探しながら、いや、駆り立てられながら、苦しいのは嫌だと、少しの間でもいい、死を先へ延ばしたいと。一体何故、人はこうも抗うのか？ 心は曇る。それが生の戯れだから。私は笑つた。

私にとつて笑ひは、ことのほか望ましく良いものであると思つたので、この地で以前、私が何人か見聞したような本物の古典的な喜劇役者が、今、ミュンヘン

ンにいないだろうかと友に訪ねた。ああ、いるよ、友人は一人知っていた。ヴァレンティーンという名だ。二人で新聞をいくつも限なく調べ、夜、いくつかの小劇場で自作「ミュンヒエンあたりの盗賊騎士たち」を上演するのを見つけた。ある夜、連れ立って出かけた。小劇場では、十時までストリンドベルイが演じられていた。それからヴァレンティーンの番が来た。小さな一座を率いた彼の演目「ミュンヒエンあたりの盗賊騎士たち」は素晴らしい作品、並外れたぶちかましだった。長いサーベルを佩いて歩き回る歩哨に扮すヴァレンティーンに、おかしなことをさせたり言わせたりするようしむげるところに、出し物の主眼があつた。時おり、すすり泣きたいほど悲しくなりもする。例えば冷え冷えとした夕べ、彼が市壁に背をもたせて腰をおろし、アコーデオンを弾いて若い頃のことや、戦争や死についてしきりに思いをめぐらす場面。あるいは、時間をかけて噛みしめるようにある夢の話をする場面。夢で家鴨になつた彼は、すんでの所で長いミミズを食べてしまふところだった。この箇所では、最大限に簡素なかたちで、人間の認識能力の不完全さが感動的に表現されていた。この悲劇的な場面でも、あのアコーデオンの場面同様、観客は満場の笑いでこたえるのだ。これ以上笑い興じている観衆を私は一度も見たこ

とがない。人は皆、何とまあ、笑いたがつているのだらう！ 寒さの中、郊外の方々から駆けつけ、お金を払い、長く待ち、真夜中になつてようやく帰宅する。しばし笑えるという、ただそれだけのために。私も大いに笑つた、勝手が言えるなら、出し物が朝まで続いてもかまわなかつた。いつまた笑えるか、神様しか知らないのだから。そして、喜劇俳優が偉大であればあるほど、彼が喜劇というかたちで描き出す我々の愚かさ、我々の愚劣で不安だらけのヒトたることの宿命が、救いようのない、恐ろしいものであればあるほど、人は笑わずにはいられないのだ！ 観客の中で私の後ろに一人の若い女性が座つていた。彼女は両ひじを私の肩に乗せて来た。私に恋をしたのかなと思つたので振り向いたが、そこにあるのは笑いだけだった。デーモンに憑かれた人のように、彼女は笑いに突き上げられていたのだ。ヴァレンティーンの思い出は、この旅行で得た貴重なもののひとつである。

だが、私は十二分に長くミュンヒエンに滞在し、友人の食卓の世話になつた。「しつかりしろ」、私は自分に呼びかけ、出発を決意した。今度はもう、かつて、口カルノを發つた時とは違つていた。今は最早、別離が軽くなかつた。今度は、世界へと、後に残る人を優越の感情を抱いて見ながら出立することはできなかつ

た。今は戻るのだ、檻へ、寒い場所へ、呪縛の中へ。まあいい、風に抗ったとて、木の葉は風の捕えるままに行くよりない。私はこれからどこへ行くのだろう？ あと何日、帰宅を引き延ばしていられるだろうか？ 多分、まだしばらくは旅をしていられよう、ひと冬の間か、一生涯か。どこへ行っても、やはりあれこれと友人を見つけるだろう、一夕、葡萄酒をとにもするくらいなら。あちらこちらで何かの黄昏時に私の良き霊たちに出逢うだろう。青春時代、私にとって神聖であった様々のものにも。そしていずこにあっても、冷たい風に舞い飛ぶ枯葉を悲しむばかりでなく、笑うのは、私の意に任されているだろう。だがもしかしたら、時々思ってみたように、一種のフモリストに似た何か私の中に隠れているのかも知れない。そうであれば、私については心配ない。そのフモリストがまだ完全に生育しきっていないというだけだ、私の状態がまだ十分に悪くなりきっていないかったというだけなのである。

訳者記・本稿作成に際し、日本ヘルマン・ヘッセ研究会の山本洋一氏、高橋修氏に多くの有益な指摘をいただいた。